

京都市内遺跡発掘調査概報

平成11年度

2000年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

ごあいさつ

京都は、世界に誇る数多くの歴史遺産に恵まれた大都市であります。市内の埋蔵文化財包蔵地には、年代ごとに幾層にもわたり積み重ねられ、歴史の重みをもつ遺跡が数多く存在いたします。

このような埋蔵文化財は、我が国の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり、将来にわたって保存すべきものであります。

近年、埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等による開発行為は、これらの埋蔵文化財に少なからず影響を及ぼしており、先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私達は、その保存と開発との調和を図りながら、これを後世に伝承していく責務があると考えております。

本報告書は、平成11年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書であります。調査のうち、試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し、発掘調査及び立会調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託し実施したものであります。

結びに、今年度の各調査の実施に当たりまして、御理解と御協力を賜りました市民の皆様をはじめ、御指導と御助言を賜りました関係機関の皆様に深く感謝申し上げますとともに、本報告書が京都の歴史を知るための一助として、お役に立てれば幸いに存じます。

平成12年3月

京都市文化市民局長 坪 倉 譲

例 言

- 1 本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成11年度の京都市内遺跡発掘調査概要報告である。
- 2 調査地は、下記のとおりである。
 - I 鳥羽離宮跡第141次調査 伏見区竹田浄菩提院町76
 - II 中久世遺跡 南区久世中久世町4丁目37
- 3 本書の執筆分担は以下のとおりである。
 - I-1・2・4 小森俊寛、I-3 小森俊寛、原山充志
 - II-1~4 出口 勲
- 4 整理作業および本書の作成には、上記執筆者の他に以下のものが参加した。

小寺末之、村上 勉
- 5 遺跡・遺物の写真撮影は、鳥羽離宮の遺跡については小森俊寛が、他は村井伸也、幸明綾子が担当した。
- 6 本書で使用した遺構の略記号は、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 本書で使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。調査における測量基準点の設置は、宮原健吾が行った。本書中で使用した方位及び座標の数値は、平面直角座標系VIによる。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。
- 9 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画図（城南宮、久世・寺戸、縮尺1/2,500）、国土地理院発行京都南西部（縮尺1/50,000）を調整したものである。
- 10 本書の編集は、小森俊寛が行った。

本文目次

I 鳥羽離宮跡第141次調査

1 調査経過	1
2 遺構	
(1) 層位	3
(2) m ² 単位の層位別遺物採取	5
(3) 遺構	9
3 遺物	
(1) 概要	14
(2) 主要遺物	18
4 まとめ	24

II 中久世遺跡

1 調査経過	
(1) 調査に至る経緯	26
(2) 調査の経過	27
2 遺構	
(1) 層序	27
(2) 遺構	28
3 遺物	
(1) 土器	35
(2) 石器	37
4 まとめ	39

図 版 目 次

- 図版 1 鳥羽離宮跡第141次調査
- 1 調査前全景 (南西から)
 - 2 調査区全景 遺構面 1 (北西から)
- 図版 2 鳥羽離宮跡第141次調査
- 1 土壌17 (北から)
 - 2 調査区全景 遺構面 2 (南から)
- 図版 3 鳥羽離宮跡第141次調査
- 1 断割り北・東トレ 灰褐色粘質土排土後 (南西から)
 - 2 北壁層位別遺物採取区・人や偶蹄目の足跡 (南から)
- 図版 4 中久世遺跡遺構
- 1 調査区全景 弥生～古墳時代 (東から)
 - 2 方形周溝墓 1 (東から)
- 図版 5 中久世遺跡遺構
- 1 調査区全景 飛鳥・奈良・平安時代 (東から)
- 図版 6 中久世遺跡遺構
- 1 建物10 (西から)
 - 2 建物12 (北西から)
- 図版 7 中久世遺跡遺物
- 1 出土土器

挿 図 目 次

図1	調査地周辺図 (1 : 2,500)	2
図2	調査区位置図 (1 : 1,000)	2
図3	層位図 (北壁遺物採取区・断割北壁合成 1 : 20)	4
図4	遺構面1平面図 (1 : 100)	10
図5	遺構面2平面図 (1 : 100)	12
図6	出土土器・陶磁器実測図 (1 : 4)	20
図7	北殿庭園地業内出土土器 (1 : 4)	21
図8	出土瓦拓影 (1 : 4)	22
図9	調査位置図 (1 : 5,000)	26
図10	調査区配置図 (1 : 500)	27
図11	西壁断面図 (1 : 100)	27
図12	平面図 (弥生～古墳時代 1 : 150)	29
図13	方形周溝墓1・土壇2遺構実測図	30
図14	竪穴住居7遺構実測図 (1 : 100)	31
図15	平面図 (飛鳥・奈良・平安 1 : 150)	32
図16	建物10・11・12遺構実測図 (1 : 100)	33
図17	土器実測図 (1 : 4)	36
図18	石器実測図 (1 : 2)	37
図19	弥生～古墳時代遺構復元図 (1 : 5,000)	38

表 目 次

表1	遺物採取区の層別の遺物重量表	6
表2	遺物採取区の層別の遺物破片数表	7
表3	遺構概要表	9
表4	遺物概要表	14
表5	各時期の層・遺構の種類別破片数表	16

I 鳥羽離宮跡第141次調査

1 調査経過

調査の対象地は、京都市伏見区竹田浄菩提院町76に所在する芝薄氏の宅地北半部である。芝氏宅地は油小路通と新城南宮道羽東師墨染線の交差点北東角に位置し、東隣りには平安時代末期以来の歴史を持つ北向不動院が現存している。

今年芝氏が敷地北部に事務所兼倉庫新築を予定され、その工事に先立ち京都市埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施した。その結果、現表土下-1.1m程以下で平安時代後期の遺物包含層がほぼ水平に堆積していることを確認した。この遺物包含層はその検出状況から東殿の殿舎が建っていた整地土層と推測された。このため新築工事に先行して文化庁国庫補助金による発掘調査を行なうこととなった。発掘調査は、(財)京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて実施した。実際の発掘調査は、平成11年5月25日から表土層の機械掘削を始めて、調査作業は同年7月14日で終了した。梅雨期の関係で調査地の埋め戻し作業に少々手間だったが、それも7月21日には完了している。

鳥羽離宮跡は、現在は名神高速道路京都南インターの南隣接地に位置する鳥羽竹田の地に広がる、平安時代後期に始まる広大な遺跡である²¹。下層には弥生時代～古墳時代の遺跡も存在しており、鳥羽遺跡と名称が与えられている。鳥羽離宮跡は、史料によれば幾つもの殿舎と伴う苑池によって構成されており、全体が鳥羽殿と総称されていたようである。鳥羽殿は白河上皇によって応徳3年(1086)から、最も南西部に位置する南殿の造営から始まっている。以後、北殿、馬場殿、泉殿、東殿、田中殿と次々と造営が続き、12世紀初頭頃には基本的な骨格はほぼ完成を見ている。鳥羽殿は白河上皇が行なった院政の舞台として歴史的に著名な宮殿である。鳥羽殿の盛衰は、白河上皇後、鳥羽上皇、後白河上皇と続く院政の盛行とその後の後退によく連動しているように見える。140次にわたる鳥羽離宮跡の既調査による成果も、史料からの歴史的理解を裏付けつつある。

今回の調査対象地は、鳥羽殿のなかでは東北部に位置するとされている泉殿、東殿などが推定されている地域内に位置する。泉殿、東殿の推定地域の西部には、白河天皇陵、東部には鳥羽天皇陵、近衛天皇陵などが築造されて現存している。北向不動院の東側から南側には既発掘調査によって東殿の広大な苑池が確認されている。しかし、東殿の殿舎はまだ確認されていない。今回の調査対象地は、既発掘調査の成果などから東殿の御所などの殿舎が推定されている。東殿関係の殿舎の検出が、今回の発掘調査の重要な課題の1つである。また東殿が形成された原地形や下層遺跡の把握、及び形成以後の衰退過程の把握なども基本的な調査課題である。

今回実施した発掘調査では、平安時代後期に形成された整地土層と一部ではあるがその上面に形成された東殿に関連するものと見られる建物の柱穴やL字状を呈した溝状の遺構などを検出す

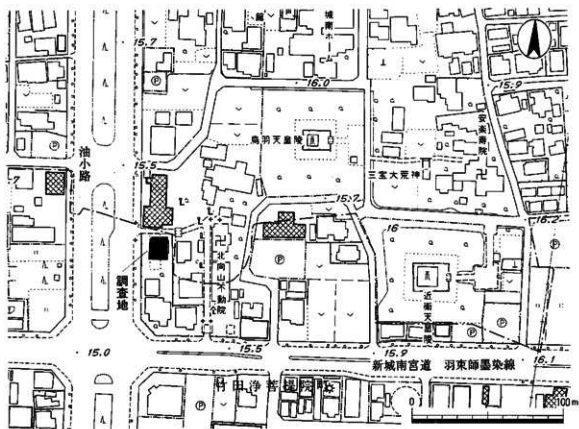


图1 調査地周辺図 (1 : 2,500)

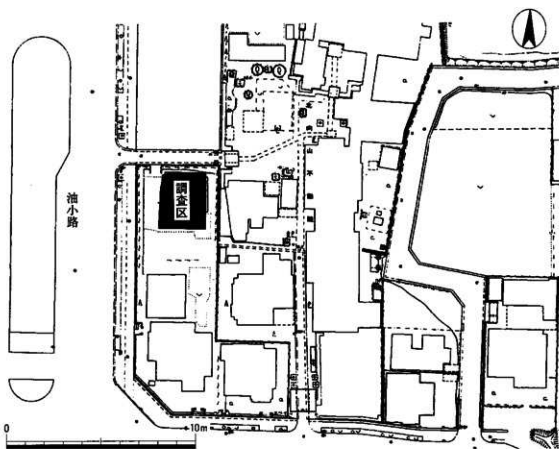


图2 調査区位置図 (1 : 1,000)

ることが出来た。さらに整地土層の下層では、上面が水田として利用された自然地形の湿地なども検出するなど、大きな調査成果を得ている。以下では、その調査成果の概要を記す。

2 遺 構

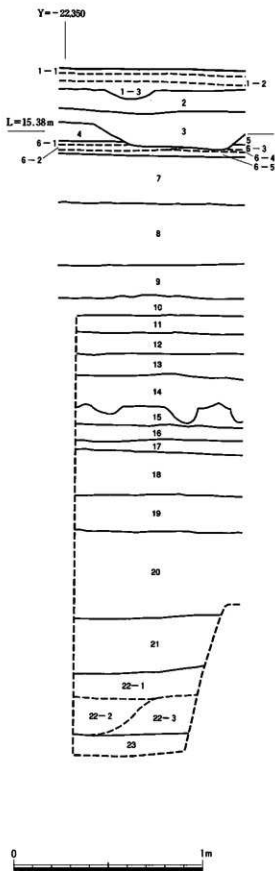
(1) 層 位

まず堆積土層について報告し、その後遺構の概要を記す。当調査地における土層の堆積状況は、南辺部とそれより以北では若干様相を異にするところはあるが、基本的にはほぼ共通した土層の堆積のあり方を示している。北壁西半部が表土層から地山まで残存状況が最も良好であり、基本層位図にもこの部分の土層断面図を掲載した。

北壁西半部では、まとめて番号を付した一連の薄い砂質土層を含めて、第1層とした表土層以下第13層までの計13層の遺物包含層を確認している。北壁付近より南へ1m以南では表土層の上に耕作土を敷き畑を作っていたが、北壁付近では見られなかった。このうち第1層～第6層までは、いわゆる山土・山砂や泥砂土あるいは砂・碎石などを用いた近代～現代の整地土層や表層土である。併せて0.45m程の厚さであり、調査地全域に広がっている。以下、第7層は厚さ約0.3m弱程で、第8層は約0.3m程の土層である。水平的な堆積状況や上面の様相や出土遺物から見て、第7層は近世（江戸時代前期～中期頃）、第8層は中世（室町時代後期頃）の整地土層と考えられる。両層とも南辺部を除くほぼ全域に広がっており、第7層は宅地に関連し、第8層は耕作地と関連した整地土層とも考えられるが、現時点では断定的な理解は難しい。

掘り下げ時に黄褐色泥砂層とした第9層は、第8層直下で現表土下-1.0～-1.1m程のほぼ平坦な上面が検出される。第9層は0.2m程の厚さで広がっており、上面を遺構面1として調査している。平安時代後期の遺構群の大半は第9層上面の遺構面1に展開している。第8層との関連から、遺構面1は遺構面としては室町時代後半代まで残存していた可能性が高い。第9層から出土する遺物は、平安京V期古に属するものが主体を占めており、それらは平安時代後期の11世紀末（～12世紀初）頃に比定することが出来る。調査区南西部では第9層は認められないが、同時期に比定出来る遺物を包含する灰色の色調を持つ粘質土層が第9層と対応するように平坦な遺構面を形成するかたちで堆積している。土質や色調に差はあるが、同時期に入れられた整地土層の一部と見てよいだろう。

第10層～第13層も、それぞれ色調や土質に微妙な差異をもつが、平安時代各時期の（整地）積土土層と見られる。第10層は0.1m程、第11層も0.1m程、第12層が0.15m程、第13層が0.15～0.2m程の厚さで、上面がほぼ平坦で水平的に広がっている。このうち第10層と第11層は、平安時代後期に同時に入れられた可能性が高く、第10層上面は遺構面2として調査しており、平安時代後期に比定できるピット等の遺構を少数検出している。出土遺物から見ると、第10層・第11層と第9層とは大きな時期差はなく、平安時代後期の11C末（～12C初）頃に若干の時期差を持つだけで積み上げられた整地土層と考えられる。それぞれ泉殿と東殿の築造と関連した地業とも推測されるが、断定的な解釈は今控えておく。なお、これらの平安時代後期の整地土層は、北方の



- 1 現代。
 - 1-1 表土。10YR4/3にぶい黄褐色泥砂。
 - 1-2 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂。
 - 1-3 10YR6/8黄褐色山砂。
- 2 現代。10YR4/3にぶい黄褐色泥砂。礫多い。
- 3 現代か。2.5Y4/2暗灰黄色泥砂(～砂泥)。
- 4 近代。10YR4/3にぶい黄褐色泥砂。細砂主。
- 5 近代。10YR4/3にぶい黄褐色～4/4褐色砂泥(～泥砂)。
- 6 近代。
 - 6-1 10YR5/2灰黄褐色泥砂。細砂主。
 - 6-2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(～泥砂)。
 - 6-3 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(～泥砂)。細砂主。
 - 6-4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥。
 - 6-5 10YR4/3～5/3にぶい黄褐色、5GY6/1オリーブ灰色細砂。
- 7 近世前期後～中期始。10YR4/3～5/3にぶい黄褐色砂泥。炭混。
- 8 中世(15C末～16C前葉)。10YR3/3暗褐色砂泥。炭混。
- 9 黄褐色泥砂層。平安V古。整地土層。10YR5/2灰黄褐色泥砂。礫ほとんどなし。
- 10 褐色泥砂層。平安V古。整地土層。5Y7/2灰白色～7/3浅黄色、2.5Y6/4にぶい黄色泥砂。
- 11 褐色泥砂層下層。平安II～III。整地土層。10YR6/2灰黄褐色～6/5にぶい黄褐色、5Y7/1灰白色泥砂。
- 12 暗褐色泥砂層。平安II中～新。耕作土か。10Y6/1褐灰色～5/2灰黄褐色泥砂。粘質土混。10YR6/6明黄褐色、7.5YR5/6明褐色斑点(鉄分か)
- 13 灰褐色粘質土層。平安I新～II。耕作土か。2.5Y5/1黄灰色泥砂。粘質土混。10YR6/6明黄褐色、7.5YR5/6明褐色斑点(鉄分か)
- 14 洪水砂層。2.5Y6/2灰黄色～10Y7/1灰白色砂。
- 15 灰色粘質土層。耕作土か。5Y5/1灰色粘質土。10Y3/2黒褐色～3/3暗褐色小斑点(鉄分か)
- 16 黄褐色粘質土層。床土か。2.5Y6/4にぶい黄色～7/6明黄褐色粘質土。
- 17 N6/0灰～2.5GY6/1灰オリーブ色粘土層。
- 18 N4/灰色～3/暗灰色粘土層。
- 19 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土層。
- 20 10GY暗緑灰色粘土層。
- 21 N2/黒～3/暗灰色粘土層。
- 22
 - 22-1 7.5Y4/1灰色粘土層。砂礫混。
 - 22-2 7.5Y4/1灰色粘土層。砂礫混り始める。
 - 22-3 7.5Y4/1灰色粘土層。砂礫多い。
- 23 N5/～6/灰色砂礫。

図3 層位図(北壁遺物採取区・断割北壁合成 1:20)

近接地に想定し得る、自然地形の微高地の地山土を削平して、用土としているものと見られる。

第12層・第13層は、断割り調査区と同層から出土したものを加えても遺物出土量はごく少なく、出土遺物からの時期限定は難しいが、平安時代前期から中期の時期幅のなかで積み上げられた土層と見ているが、自然堆積層である可能性も否定しきれない。いずれにしろ耕作に関連した土層と見られる。

第14層は灰色の色調を持った砂層であり、厚さ7～15cm程で第15層の上面全体に堆積している。上面まで、現表土下-1.8m程を測る。第13層との関連からは、平安時代初頭頃かそれ以前の洪水による堆積砂層と見られる。第15層は厚さ15cm程でほぼ水平に堆積した灰色の粘質土である。マンガン分を含むのか鉄分だけによるのかは決し難いが、茶褐色を呈する金属の酸化物が斑点状を呈して密に含まれている。また同層上面には、人や偶蹄目(牛だらう)の足跡が数多く残っていた。足跡の小凹に第14層の砂層が入り込んで堆積した結果、足跡全体が足を抜いた直後の形状を良好に残存したものと見られる。足跡は、もう少し広く調査区を設定して丁寧に調べれば、人や牛の歩行状況を把握出来て、牛耕についても明らかに出来たと思うが、調査期間の問題からあまり丁寧に調査出来なかつたので、全体的な様子は明らかに出来なかつた。しかし、畦等の検出は成らなかつたが、水平に近い上面やその上に残った足跡並びに堆積状況また金属酸化物の斑点状態などからは、稲作に用いられた水田跡であると考えられる。この見方を確認する意味でも、同層を対象にしたプラントオパール(PO)の調査を行ないたいと考えて、定量の土のサンプリングは行なっておいた。

第16層は黄褐色の色調を持つ粘質土であり、厚さ0.1m程で直上の第15層同様にほぼ水平に堆積している土層である。第15層直下では調査区全域に認められ、第15層に対して床土的機能を持つ土層と考えている。以下の第17層から第22層は、灰色から緑灰色あるは暗灰色(黒っぽい)の色調の粘土層であり、比較的規模の大きな自然の湿地状凹地内の自然堆積土層であると見ている。7層あわせて1.6m程の厚さとなり、調査区内全域及び外方へ広がっている。この理解からは、第15層・第16層ともに本来は自然堆積の粘質土層であったとも見ることが出来るので、自然の湿地内堆積粘土層の最上層を水田として利用した可能性が高いと考えている。

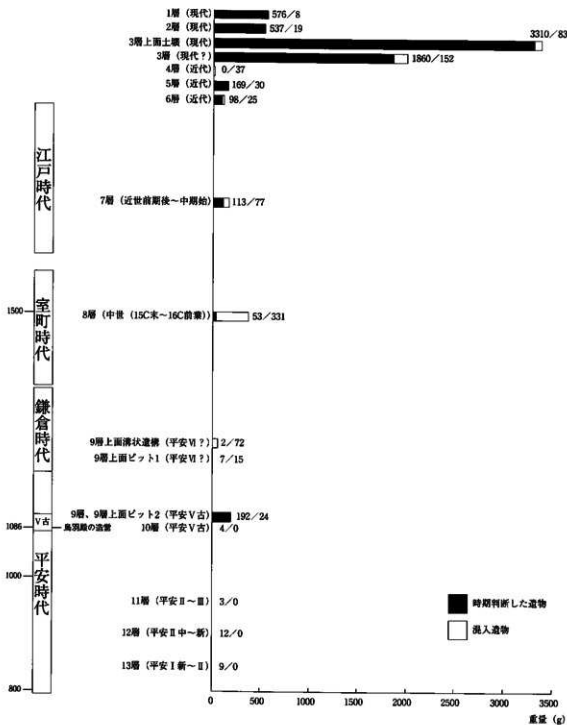
調査対象と出来た最下層の第23層上面は、現表土下-3.5m程を測る。第23層は灰色の砂礫層であり、この層も自然堆積土層と判断している。梅雨さなかでの調査であったためか、同砂礫層は完全な湧水帯となっており、第22層の粘土を掘り下げ排土した瞬間に大量に水が湧き出して来て数分で断割りピットは浸水してしまった。

(2) ㎡単位の層別遺物採取

今回の調査地でも、調査の最終段階に北壁の西部で1㎡分の層別遺物採取を行なった。方法は、通常の発掘調査と基本的には同じ方法で実施するが、調査時に検出した表土層以下の全土層を対象に行なう点が最も大きな差異である。

作業手順は、最初に壁沿いの現地表に単位分の小調査区の設定を行ない、次に調査区壁面を利

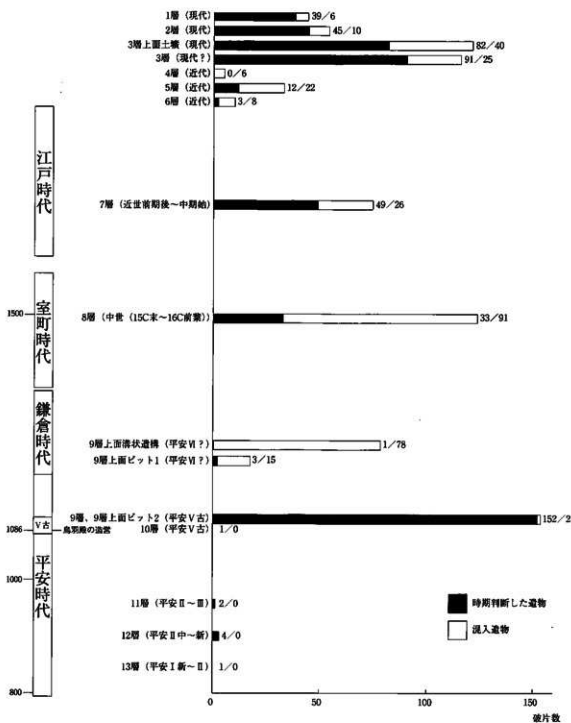
表1 遺物採取区の層別の遺物重量表



・グラフの各層は、近現代のものを除いて、層の年代を視覚的に理解しやすくするため、縦方向の幅が実時間の差を表すように、グラフの位置を割り振ってある。推定年代に幅があるため、その幅のなかで適当に表示した。したがって、グラフの縦の幅が各層の厳密な時間幅を表すわけではない。

・グラフの右の数字は、遺物の重量合計を示す。/で区切られた数字は、左が時期判断した遺物の重量合計、右が混入遺物の重量合計を表す。

表2 遺物採取区の層別の遺物破片数表



・グラフの各層は、近現代のものを除いて、層の年代を視覚的に理解しやすくするため、縦方向の幅が実時間の差を表すように、グラフの位置を割り振ってある。推定年代に幅があるため、その幅のなかで適当に表示した。したがって、グラフの縦の幅が各層の厳密な時間幅を表すわけではない。

・グラフの右の数字は、遺物の破片数合計を示す。/で区切られた数字は、左が時期判断した遺物の破片数合計、右が混入遺物の破片数合計を表わす。

用して対象範囲に分層ラインを明示する。その後表土層から順次、土層毎に掘り下げた遺構面の検出作業を進めていく。堆積層が厚ければ、手順上で一定の厚さに掘り分けて誤認がないか確認しながら掘り下げを進めて行く。各遺構面で遺構が検出されれば掘り分ける。必要があれば確認して遺構面毎に写真・実測ほかの記録作業を行なう。土層毎に含まれている遺物はすべて採取する。このため掘り下げた土は直接排土せず、一度板の上などに拡げて遺物の有無を精査した後に処分する。

この作業の目的は、機械力で排除した土層と遺構面の検証、調査済遺構面とそのベース層の再確認、及び地山土層も含めた表土層以下全土層を対象にした定量的遺物採取である。遺構面の検証や再確認は、分層済の調査区壁面を利用して狭い範囲を横方向から作業を行なうので、かなり高い精度が期待できる。土層毎に採取した遺物は、破片数と重量で定量的分析を行ない資料化する。その際には、混入遺物と主体を成す型式とを明らかにして、土層の堆積（積み上げ）時期をより正確に把握する。このようにして得られた絶対量的一面を持つ各土層毎（時代別）の遺物出土量の推移は、遺跡の盛衰を実証的に示す基礎資料と成り得るものと考えている。

今回の調査地で得られた資料は、層別別に出土遺物の総重量をまとめてグラフ化して提示している。破片数量でも同様のグラフを作っており、重量グラフとは質量の反映のあり方に差が出ていて、理解を記すべきとも考えるが別稿とする。もちろん時代（土層）によって出土遺物に内容差はある。今回の資料では、平安時代後期の遺物は、瓦を含むが土師器と瓦器の食器が主体であり、近世以降の遺物は瓦類や陶磁器類が中心である。異なる種類のを同列に扱っていることに観念的な批判も出来るだろうが、実際の資料を見て遺物の種類別の増加も検討すれば興味ある実体を明らかにし得るだろう。しかし、今回は資料の提示にとどまるので、それらの検討と理解は別の機会としたい。

ここで提示したグラフを見ていると、平安時代の後期に出土遺物量が一定量ではあるが急に増加することが判る。この遺物の増加が、鳥羽離宮の造営に伴うものであることは言うまでもないが、離宮の造営がそれまでの当地の土地利用のあり方とは異質なものであったこともまた示していると理解される。鎌倉時代に入ると再び出土量が減少するが、平安時代末期から鎌倉時代初めには鳥羽離宮の使用の在り方が大きく変化することを反映していると推測出来る（これは今のところ当地に限って見るべきだろう）。今回の調査地では、鳥羽離宮に関連する遺構の様相もこの頃に大きく変化することが明らかとなっている。遺物出土量の増減が遺構の盛衰を示す物証であることが理解出来る。室町時代後期の若干の増加と、江戸時代以降の継続的な大きな増加も、遺構・土層の変化と連動したものであると理解してよいだろう。これらの遺跡様相の変化は、遺構のまとめの項で記した内容とほぼ共通するものなので、ここではこれ以上記さない。ただ、近世以降の遺物である物質資料の増大を理解する上で、近世以降の社会が生産力・経済力の発展度において、中世以前の社会とは大きな格差を持っていることを基本的なところで認識しておく必要があると考えている。

m²単位の層別別遺物採取資料は、1つの単位の資料だけでも、対象とした遺跡を等価なレベル

で歴史変化のなかに据えて相対的な評価が行なえる面を持っている。さらに、遺跡内外を問わず同等な資料を蓄積して比較・検討出来れば、遺跡の歴史的な性格に対する実証的理解を深める重要な基礎資料となるものと考えている。

(3) 遺構

第9層上面の遺構面1、及び第10層上面の遺構面2で検出した遺構を中心に記す。

遺構面1は、先に記したごとく平安時代後期の整地土層である第9層黄褐色泥砂上面を人為的に平坦にして形成された生活面（遺構面）であり、整地土層及びその上面を含めた全体も1つの遺構ではある。これらの地業が行なわれる直前の当地は、北部あるいは北東部に対しては相対的に耕作地として利用されていた低湿地側に位置していたと理解される。調査地の外部からの搬入土を積土することによって整地作業が行なわれたと解される。整地以後も相対的低さが全面的に解消されなかったためか、上面が後代に削平された様子はなく遺構面は形成当初に近い状態で遺存していたものと見られる。後代の整地作業も積土して行なわれた結果か、北側隣接地との本来的な比高差は近世頃までにはほとんどなくなっていたと見られ、そのうえ近代～現代では比高差が逆転し北側隣接地より若干ながら高くなっている。

遺構面1では、土壌、ピット、溝、溝状遺構、落ち込み、井戸、石組遺構など各種の遺構を数多く検出し調査している。井戸と石組遺構、溝状遺構の一部を除くと、他の遺構の大半は平安時代後期に形成されたものである。これら平安時代後期の遺構は、その廃絶が鎌倉時代前半期～室町時代にまで下がるものがあるが、多くは平安時代末期～鎌倉時代初頭頃までに廃絶してしまっている。

ピット1～4・6～10・14、および土壌17とした遺構などは、掘立柱建物の柱穴と見てよいと考えている。これらのうちでは、土壌17としたものが掘形が最も大きく、柱あたりも確認出来た柱穴である。掘形は南北に少し長い形状を呈すると見られるが、北部が擾乱1に削除されているため判らない。南辺は0.6m程、柱あたりはほぼ円形の径0.3m強を測る。西側及び南側では対応する柱穴はなく、北側及び東側に関連する柱穴が存在していたと推測されるが、両方向とも溝状遺構3や擾乱1などの新しい時期の遺構によって削除されてしまっている可能性が高くよ

表3 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代中期後半代以前	耕作地（水田址）	
平安時代後期	整地土層（黄褐色泥砂、褐色泥砂層ほか） 建物柱穴（土壌17、ピット1～5・14ほか） 溝1最下層（暗渠状の遺構）、溝状遺構3～5ほか 土壌4・6・12・16・18ほか	
鎌倉時代前期	土壌9、溝状遺構6ほか	成立年代ではなく埋没年代である
室町時代後半期	土壌3、落ち込2、溝状遺構3	耕作地関係の遺構か
江戸時代～近・現代	井戸1～4、溝状遺構1、石組遺構1など	

Y = -22,350

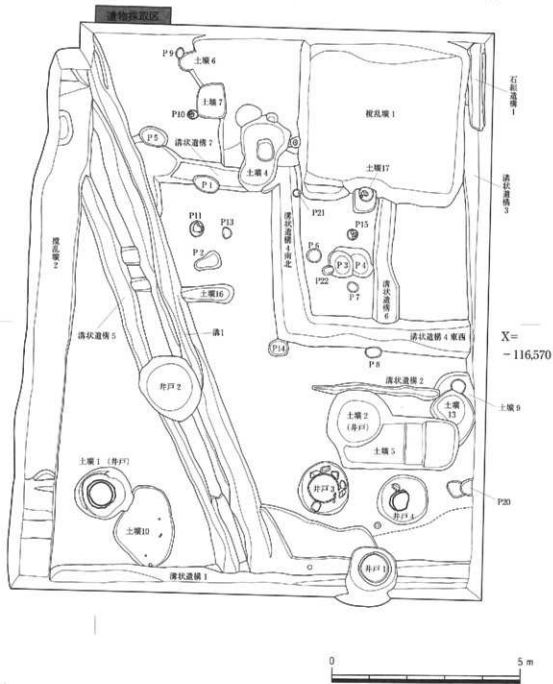


图4 遺構面1平面図(1:100)

く判らない。現状の検出状況では、規模のしっかりした掘立柱建物の南西角の柱穴であろうということしか言えない。ビット1・2、及びビット3あるいはビット4も、北側と東側への伸びを確認出来なかったが、同様に別の1軒の掘立柱建物の南西コーナー部の柱穴であろうと推測している。これら柱穴間の柱間は心々で2.0~2.1m程である。これらの遺構は平安時代後期に形成され、平安時代末期頃から鎌倉時代初頭頃には廃絶している。

溝状遺構4は、調査区北東部の外郭を南西方向からほぼ直角に折れ曲って東方向へ延びる、検出した部分ではL字状を呈する遺構である。幅は0.8~0.9m程で、深さ0.3mを測り、断面はやや深めの皿状を呈し、底部レベルは北から南へ、さらに東へゆるやかに下がる。溝内には粘土を含む泥砂土が堆積しており、大きく上下2層に分層出来る。攪乱填などで北側と東側への伸びが判らないので溝状遺構としたが、断面形状、堆積状況、底部の勾配等、及び北方と東方へさらに延びていた可能が十分にあることなどから、L字状に折れ曲って設置された東方向へ流れる溝と見てよいだろう。出土遺物からは平安時代後期には設定されており、遅くとも鎌倉時代前半期のうちには完全に埋没している。時期的に見て、柱穴土壌17を含んだ推定建物と何らかの関係を有する溝の可能性があると考えている。

今回の調査においては、平安時代後期の整地土層とその上面で同期建物の南西コーナーを含む部分を検出することが出来た。同期の遺構群の展開状況や泉殿・東殿関係の既調査成果を加えて考えるならば、東殿関係の殿舎の1棟が存在していたであろう敷地の南西部域を調査出来た可能性が大きいものとする。

溝1は調査区西半部を北北西方向から南南東方向に走り、南南東方向に流れていた溝である。幅は0.7~0.9m程、深さは深い部分でも0.5m程を測る。溝の底部は北側2/3程が一段深くなる。下層・最下層として掘り下げたが、一段深くなった部分には、拳大の礫や瓦片(平安後期瓦)が数多く入れられていた。この部分を見ると、水引きを良くするための暗渠施設とも見られる。暗渠状の部分からの出土遺物は、瓦が主であるが他に土師器皿なども少数出土しており、V期古(11C末~12C初)を主体とする。暗渠状の部分の上面からは1点ではあるが、V期古に属するほぼ完形のコースター形の土師器皿A cが出土している。溝埋土の中~上層部分からは、平安時代後期の遺物を主体としながらも室町時代後半期の遺物が同時出土している。このため溝1を設置した年代の推定はかなり難しいが、平安時代後期には暗渠状の部分を含めて築造されていて溝として機能しており、完全に埋没した最終年代が室町時代の後半期であると考えておきたい。溝状遺構5~7、土壌4・6・7・11・12なども平安時代後期に比定出来る遺構であるが、性格も明確には把握しきれていない。

遺構面2は、前述した平安時代後期に形成された遺構面1に若干先行する遺構面であるが、大きな時間差はなく同じ平安時代後期のうちに形成されている。遺構面2では、柱穴と見られるビットを少数検出したにとどまる。遺構の検出状況からも長く遺構面(生活面)として使用された印象が薄く地業の手順により生み出された一定期間だけ面を露出していたものである可能性もある。しかし検出した少数のビットからの出土遺物は、第9層や第9層上面に展開する最も古く位

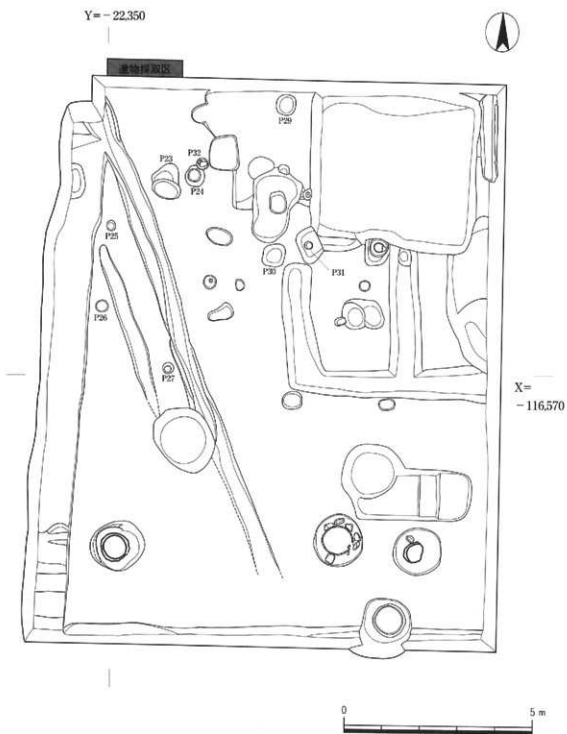


図5 遺構面2平面図(1:100)

置付けられるものよりも、多く古相を残すものが中心である。このため、いずれにせよ短期間ではあるが、遺構面2は第10層上面に目的意識的に形成された遺構面（生活面）であると考えている。

上述してきた平安時代後期の遺構群は、調査区の主に北半部分に展開しており、北から東側に関連する遺構が広がっていると見られるが、調査区南半部では同期の遺構は少数しか検出していない。

調査区の南部で検出した遺構は、検出面より上層の遺構面から成立している井戸、土壌、溝状遺構など近世～近・現代にかけての深い掘り込みの遺構などが主である。

井戸1～4及び土壌1・2とした遺構は、近世～近代に設置された井戸であり、井戸1は現表土に井筒が作り替えられていて機能を保持した状態で維持されており、今回の調査開始時に上半部を機械力で除去している。これらの成立面は近世土層である第7層上面かあるいはそれより上層である。井戸1は、表土層より上部はコンクリートの方形井筒であったが、それより下は円筒形の漆喰井筒であった。漆喰井筒は径0.9m程で、厚さ7～8cm、高さ0.6mで、3段半程確認した。構築年代は明治時代から江戸時代末期にまで遡る可能性がある。土壌1（井戸）、井戸3・4では、検出面よりも数十cm下で、桶あるいは種々の円筒状縦板井筒を2段ほど確認している。井戸2、土壌2（井戸）では、井筒等を検出できなかったため、素掘り井戸であったのか、廃棄時に施設を取り去ったのかは不明である。これらの井戸のなかでは、土壌1とした井戸が、江戸時代前期のうちに形成されていたようであり、最も古いものであると見られる。土壌2、井戸2・3・4も、江戸時代のうちに造られているようである。埋没年代は、井戸4が最も古く、江戸時代前期後半～中期初め頃であり、土壌2とした井戸はそれより少し下るとみられるが、中期の前半頃には埋まっている。井戸2は江戸時代後期のうちに、井戸3は江戸時代後期から近代初め頃には埋没している。出土遺物から見ると、2基ほど並存していた可能性も考え得るが、各時期には1基ずつ掘り替えられては廃棄されていた可能性が大きい。

溝状遺構1は、南壁沿いに北肩部を検出しているが、南肩部は南壁外と見られ検出できなかった。北肩部や北側斜面の様相や堆積状況からは、東西方向に延びる比較的大きな溝と推測される。成立面は第8層上面からと見られ、第7層が入れられた時点で一部埋められるようであるが、第7層上面段階でも機能は維持されている。第6層が入れられた時点では、完全に埋没して廃棄されてしまったものと見られる。

調査区東壁際で検出した遺構3、及び東壁際北部で検出した石組遺構1は、東壁東外廊を南北方向に走る用水路に関連した遺構と見られる。遺構の一部を検出しただけであり、全容は推測することも難しいが、北向不動院の関係者からの伝聞や、古地図によれば、東側隣接地の北向不動院敷地と当敷地の間には耕作用の用水路が近年まで存在していたとのことである。溝状遺構3とした遺構はその用水路の前身とみられる南北溝の西側から西側壁の一部であり、石組遺構1は、北向不動院の西門に関連した部分的な護岸石垣の西南部分と考えられる。溝状遺構3は、第8層上面成立以降にも継続しているようであるが、その成立は第9層上面になる可能性が高く、

中世段階ですでに形成されていたものと考えている。

これらの中近世の遺構のうち、溝状遺構1・3は耕作地に関連して設置された用水路の一部と理解される。しかし調査区南半部で主に検出した近世以降の井戸群は、近世に入って当敷地が再び宅地として利用されて現代にまで至っていることを示す遺構である。

3 遺 物

(1) 概 要

今回の調査では、奈良時代以前に明確に比定出来る遺物は混入品を含めても出土していない。混入品のなかに問題の残るものもあったが、小片であり古い時代と結論の出せるものはなかった。平安時代前期から中期にかけての遺物は、第12層・第13層などの遺物包含層、ほかに混入品として出土した遺物を含めてもごく少数にとどまる。土師器食器類・甕・甕、黒色土器杯あるいは碗、須恵器甕、緑釉陶器碗などが見られるが、一部を除くと小片で出土したものが多く。平安時代中期以前の遺物出土量が少ない原因は、当調査地が集落址等からは少し離れた自然の湿地を利用した耕作地として土地利用が行われていたことが基本的なものであろう。

平安時代後期の11世紀末期から12世紀代に比定出来る遺物は、第9層・第10層などの整地土層、および両層上面で成立している土壌6・12・16・17、ピット3・5・6・9・10・24~26・30、溝1、溝状遺構2・4・5、凹み1、その他から数多く出土している。個々の遺構では、出土量が多いと言えるものは少ないが、各遺構からの出土遺物に第9層からの出土遺物まで含めると、全体としては同期の京域内に比較しても大きく少ない訳ではない。第10層からの出土遺物は、第9層と比較すると型式差はほとんどないが出土量は非常に少ない。なお、これらの平安時代後期

表4 遺物概要表

時代	遺構名・層名	遺物	備考
平安時代前期	第12層、第13層	土師器食器類・甕、須恵器甕、緑釉陶器碗など	ごく少数
平安時代中期		土師器食器類、黒色土器碗など	ごく少数
平安時代後期	第9層、第10層 ピット3・5・8・9・24~26ほか 土壌6・12・16・17ほか 溝1、溝状遺構2・4・5ほか	土師器皿、須恵器碗(山茶碗)・鉢・甕、瓦器碗・皿、輸入陶磁器白磁碗・皿・水注・壺、白色土器皿・小杯ほか、瓦類(軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦)、鉄釘ほか	
鎌倉時代	第8層、溝状遺構3・6 ピット1・3ほか	土師器皿、瓦器碗・羽釜・盤、須恵器鉢、輸入口元皿ほか	出土量少ない
室町時代後半	第8層、土壌3、落込2・5ほか 溝1上層	土師器皿、瓦器羽釜・鍋、国産施釉陶器瀬戸美濃灰釉陶器片口鉢、輸入陶磁器青磁碗	
江戸時代以降	井戸1~4、土壌1・2 溝状遺構1ほか	国産施釉陶磁器唐津、瀬戸美濃、京焼、肥前陶器の碗・皿・鉢・壺、伊万里染付碗・皿・鉢・壺・土版・行平、信楽焼鉄釉播鉢、土師器皿・小壺・鉢・焙烙・壺、焼締陶器播鉢・甕、瓦類(平瓦・丸瓦・棧瓦)、木製品漆器碗・下駄、鉄釘、銅製キセル、鋤型	江戸時代前期後半以後出土量が増加する

の層・遺構から出土した遺物については、種類別の破片数資料も表にまとめておいた。

平安時代後期の遺構からの出土遺物は、土師器皿、瓦器椀、軒瓦を含む瓦類の3種類がほぼ各遺構を通して出土が見られ、量的な面での中心である。第9層からの出土遺物でも、土師器皿、瓦器椀が量的な面で主体を成している点は、遺構からの出土遺物に共通しているが、同層からは瓦類の出土数が少なめで、その点は若干様相が異なっている。上記の3種類のほかには、瓦器皿、輸入白磁椀・皿・水注、須恵器椀（山茶椀ほか）・鉢・甕、白色土器皿など京城内の出土資料ではよく見られるものも出土しているが、出土量は多くはない。

量的な面で中心的な位置を占める土師器皿と瓦器椀の出土比率は、破片数では全体的には3対1程度であり、土師器皿の方が多し。土師器皿類は、京城内の主流派と同型式と言えるものが圧倒的に主体を成しており、他地域産はほとんど見られなかった。瓦器椀は、大和産との判別に問題を残すが、楠葉産と見られるものが大半を占めており、明らかに他地域産と出来るものはほとんど見られなかった。

今回の調査地から出土した土器・陶磁器類と京城内の諸遺跡からの出土資料を比較すると、やや少なめにも見えるが、土師器皿の出土量が他を圧している点は京城内出土資料に通じる特徴である。しかし、瓦器椀が全体に対して25%前後と高い出土率を示している点は大きく様相を異にしている。輸入白磁は、瓦器椀に比べると少数しか出土していないように見えるが、全体に対する割合は、2%前後であり京城内出土資料とに大きな差はない。これら以外では、平安時代後期の出土資料のなかに土器の煮炊具がほとんど含まれていないが、この点は同期の京城出土資料と同じ傾向を示していると見える。須恵器鉢・壺・甕などの調理具及び貯蔵具類が同様に少ないが、これらの出土状況は京城内でもバラツキが見られるし、これらのような日常生活用具類が少ない点は、離宮の殿舎の敷地内という遺跡性格を反映していると思われることが出来る。少数ながら白色土器が出土している点も京城内出土資料に通じる一面ではある。

このような比較検討を行なうと当調査地から出土した遺物の様相は、京城内から出土する資料と共通する面と異なる両面を持っていることが判る。共通する面に数多く出土している瓦類を加えて見ると、京城内でも同期に院街（烏丸小路六条坊門界隈など）と呼称できる地域や六勝寺が建ち並んでいた鴨東の白河の諸遺跡から出土している遺物の様相に近似したものであると言えるだろう。京城内の中心部と直結した一面を持った烏羽離宮跡という特殊な遺跡性格を反映したものと評価出来る。しかし異なる様相を作り出している瓦器椀の高い出土率は問題となるだろう。

平安時代後期において瓦器椀が大きな位置を占めているという土器様相は、京近郊農村を含めた畿内の農業地帯に位置する遺跡からの出土資料に通じるものであり、烏羽離宮という遺跡性格が持っているイメージとは相反するという印象が強い。瓦器椀が多いという点は、今回の調査地出土資料で確認出来る京域的といえる様相の基調にも反するものである。たしかに烏羽離宮の立地条件からすれば、近郊農村的な様相と京域的な様相が入り混じった状態の土器様相が形成される可能性は十分にある。既調査成果からすれば、関連施設を含めた烏羽離宮全体では、そのような出土遺物様相を持つと見られる。しかし、ここでは結論的評価は置いておく。殿舎や園池が存

表5 各時期の層・遺構の種類別破片数表

期・型式	層・遺構	土器・陶磁器										瓦類				
		須恵器	灰釉	緑釉	白色	土師器	黒色	瓦器	輸入	焼締	国産施釉		合計			
平安Ⅰ期新 ～平安Ⅱ期古	土層灰褐色粘質土	1		4		3										8
平安Ⅱ期	土層暗褐色泥砂	12.50%		50.00%		37.50%										1
平安Ⅴ期古	遺構面2上面・遺構面2 ベース土層(褐色泥砂)					27		5								32
平安Ⅴ期古	遺構面1ベース土層(灰 色・灰白色粘質土、黄褐色 泥砂、黄褐色泥砂下層)	3			2	326		134	8							473
平安Ⅴ期	遺構面1上面A・B	0.63%		0.42%	68.92%	28.33%	1.69%									736
平安Ⅱ期新 ～平安Ⅲ期古	土層2下層	8		1	526	192	8									736
平安Ⅲ期新 ～平安Ⅳ期古	土層2下層	10.9%		0.14%	71.56%	26.12%	1.09%									4
平安Ⅳ期新 ～平安Ⅴ期古	土層6・7・16、落込 1、凹み1、ビット8・ 9・14・20・25・26・ 29・31					4		2								4
平安Ⅴ期古	土層6・7・16、落込 1、凹み1、ビット8・ 9・14・20・25・26・ 29・31					12		2								14
平安Ⅴ期古	土層6・7・16、落込 1、凹み1、ビット8・ 9・14・20・25・26・ 29・31					85.71%		14.29%								14
平安Ⅴ期古	土層6・7・16、落込 1、凹み1、ビット8・ 9・14・20・25・26・ 29・31					213	1	55	2							271
平安Ⅴ期古	土層6・7・16、落込 1、凹み1、ビット8・ 9・14・20・25・26・ 29・31					78.60%	0.37%	20.30%	0.74%							16
平安Ⅴ期古 ～平安Ⅴ期中	溝状6	1				6		3								10
平安Ⅴ期中 ～平安Ⅴ期新	溝状6	10.00%				60.00%		30.00%								3
平安Ⅴ期新 ～平安Ⅴ期	溝状9・11					24		7	2							33
平安Ⅴ期	溝1下層、溝状3下層・3 西壁・7、土層3三日月 部・4・10・12～15、落 込3・4、ビット4・7・ 10・11・13・15・18・22					72.73%		21.21%	6.06%							21
平安Ⅴ期	溝1下層、溝状3下層・3 西壁・7、土層3三日月 部・4・10・12～15、落 込3・4、ビット4・7・ 10・11・13・15・18・22	3			1	126		46	1							177
平安Ⅴ期新 ～平安Ⅵ期古	溝状2・土層17・ビット 1・3・土層9底ビット	1.69%		0.56%	71.19%	25.99%	0.56%									257
平安Ⅴ期新 ～平安Ⅵ期古	溝状2・土層17・ビット 1・3・土層9底ビット					105		7								112
平安Ⅴ期 ～平安Ⅵ期	溝状4・5					93.75%		6.25%								166
平安Ⅵ期 ～平安Ⅶ期	溝状4・5					51		33	1							85
平安Ⅶ期 ～平安Ⅷ期	ビット2					60.00%		38.82%	1.18%							48
平安Ⅷ期 ～平安Ⅸ期	溝状5					2										2
平安Ⅷ期 ～平安Ⅸ期	溝状5					100%										2
平安Ⅸ期新	溝状3					10		2	1							14
平安Ⅸ期新	溝状3					1.36%		0.27%	0.14%							1
平安Ⅸ期 ～平安Ⅹ期古	溝1上層・落込2					14		15	3	3						36
平安Ⅸ期 ～平安Ⅹ期古	溝1上層・落込2					38.89%		41.67%	8.33%	8.33%						1
平安Ⅹ期 ～平安Ⅹ期古	土層3					2		2	1							5
平安Ⅹ期 ～平安Ⅹ期古	土層3					40.00%		40.00%	20.00%							2
平安Ⅹ期古	落込1南半					2										2
平安Ⅹ期古	落込1南半					100%										2

・各型式の推定年代は、以下の通り。Ⅰ期新：9C前半。Ⅱ期古：9C中葉。Ⅱ期：9C中葉～10C前葉。Ⅳ期新：11C後半。Ⅴ期古：11C末～12C初頭。Ⅴ期中：12C前半。Ⅴ期新：12C半頃～第3四半期。Ⅴ期：11C末～12C第3四半期。Ⅵ期古：12C第4四半期頃。Ⅵ期：12C第4四半期～13C中葉。Ⅶ期：13C後葉～14C中葉。Ⅷ期：14C後葉～15C前半。Ⅸ期：15C中葉～16C最初。Ⅸ期新：15C末～16C最初。Ⅹ期古：16C前葉頃。Ⅹ期：16C前葉～16C後葉半頃。

在したある意味で純粋な離宮敷地内と、関連施設などが存在しているとされるその外圍地域では、出土遺物にも様相差が読み取れる資料も増加している。今後、定量的資料を蓄積して遺跡内における地域毎の様相を明らかにしたうえで、遺跡全体の土器様相に対する認識を深めていかなければならないと考えている。

平安時代後期に比定出来る瓦類は、先にも若干記したが、ピット3や溝1を始めとして、第9層上面に形成された遺構を中心にして数多く出土しているうえ、同期の瓦類は新しい時期の層・遺構へも数多く混入して出土している。これらの瓦類は、出土状況から見ても、当調査地の建物を含む東殿の敷舎に使用されていたものと考えてよいだろう。以下では、平安時代後期の瓦を瓦当中心にまとめた形で概述しておく。

当調査地から出土した平安時代後期の瓦類には、軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦などが見られる。軒丸瓦は31点で、三巴を主とした巴文を持つものが数多く見られる。ほかに、車輪状を呈した蓮華文を持つものなども見られるが、蓮華文は4点と少数にとどまる。これらの軒丸瓦は、大半が擬正円を呈するものである。軒平瓦は20点で、剣頭文、唐草文、巴文、格子状の幾何学文を持ったものなどが見られる。剣頭文を持つものが10点と最も多く、次いで唐草文を持つものが7点見られる。軒平瓦の大半は、折曲げとした方がよいものである。軒丸瓦、軒平瓦ともに、技法、范型、文様、形態等の特徴からは、山城産が大半を占めている。地方産のものとしては、河内産と讃岐産の唐草文軒平瓦、尾張産の巴文軒丸瓦・丸瓦・唐草文軒平瓦が各1点ずつ含まれている。これらの瓦類はいわゆる平安時代後期瓦の範疇で理解出来るものであり、出土状況と遺構解釈に大きな齟齬をきたすものはない。今回の調査の出土分に類似した瓦は、泉殿、東殿の既調査地から数多く出土しているが、若干の型式差があるのか検討が必要であろう。瓦の編年観からは唐草文軒平瓦のなかに11世紀代まで上がるものが少数含まれているが、大半は12世紀代とされているものである。

平安時代最末期～鎌倉時代初頭頃の12世紀代後半代までは、遺構とも関連して瓦を含めた遺物出土量は多いが、鎌倉時代でも13世紀代に入ると激減する。鎌倉時代に比定出来る遺物は、第8層や溝状遺構3・6上層、ピット1・3上層などから、土師器皿、瓦器碗・羽釜・鍋・盤、須恵器鉢、輸入白磁口瓦皿などが見られるが少数にとどまる。

室町時代前半期に比定出来る遺物は、鎌倉時代に比べてさらに少なく土師器皿などがごく少数混入品として見られるだけである。しかし、後半代に入ると遺物出土量がやや増加する。第8層や土墳3、落込1・2・5、溝1上層などから、土師器皿、瓦器羽釜・鍋、瀬戸美濃系の灰釉陶器片口鉢、輸入青磁碗など各種のものが見られる。これらの室町時代の遺物は、15世紀後葉から16世紀前葉頃に位置付けられるものが中心である。遺構に伴わない出土するものも見られるようになり、第8層はこの時期に積み上げられたと見られる。遺物出土量の変化は、これら遺構・土層の変化の反映と理解出来るが、これらのことから、この時代に東殿界隈の敷地の管理状況が大きく変化し、土地利用のあり方が変わった可能性が大きいと考えられる。しかし、16世紀中葉頃に降また出土遺物がほとんど見られなくなるので、当地を含む地域の利用は耕作地関係が主であっ

たと考えられる。

調査地において再び出土遺物が大きく増加するのは、17世紀後半の江戸時代前期後半頃以降である。第7層から上層の土層や溝状遺構1、井戸1～4、土塙1・2とした井戸など調査区南部で検出した遺構からは、江戸時代～近代の遺物が出土している。江戸時代の遺物には、唐津・瀬戸美濃・京焼・肥前・信楽などの国産施釉陶器類の碗・皿・鉢・壺・鍋・摺鉢、伊万里の染付磁器の碗・皿・壺、信楽もしくは丹波の焼締陶器摺鉢・甕、土師器皿・鉢・小壺・焙烙・壺・コンロ、木製品漆器碗・下駄、銅製キセル、鉄釘、鋤型、平瓦、丸瓦、棧瓦など各種のものがみられる。いわゆる高級品はあまり含まれていないが、焼き物を中心とした日常生活用具類を主体とする遺物である。

このような江戸時代前期半頃を目安とする土層や遺構形成と関連した遺物出土状況の大きな変化は、当地を含む地域全体の変化のなかで理解すべきであろう。変化して以降の継続的な遺物の出土状況からも、当地は江戸時代前期に耕作地から宅地へと転換して以降、近・現代まで継続的に同様な土地利用が行なわれたものと理解される。

(2) 主要遺物

実測図あるいは拓影を掲載した土器・陶磁器、および瓦類について以下で記しておく。

土器・陶磁器

掲載した土師器食器(皿)類は、出土単位を問わずにすべて京城内出土資料の主流派に通じるものである。胎土は、小砂粒を若干含むが、細かく良質な粘土が使用されており、色調は淡褐色から淡褐色を呈し、ほぼ共通している。製作技法も基本的には共通しており、押さえとナゲ調整によって仕上げた、いわゆる「てづくね」成形である。掲載しなかった他の土師器食器(皿)類でも、同様のものが主体を占めている。また、土師器食器類に共伴出土している他の土器・陶磁器類も、大半が一般的に見られる京城内出土資料に通じるものである。このため、京城内出土資料を主に用いた型式編年観を、ほとんど修正する必要なく用いて位置付けができる。以下では、1996年に(財)京都市埋蔵文化財研究所の研究紀要に発表した型式的な編年案²³²を基にして記す。用語やその概念も、まったく変更することなく記す。たとえばV期古に属すると記した場合は、京都V期古型式に属するということである。V期全体の推定時期幅は西暦1080年代から1170年代であり、そのうちで古(型式)は西暦1080年代～1110年頃、中(型式)は西暦1110年頃から1140年頃、新(型式)は1140年頃から1170年代である。

図6の1は、遺構面2で検出した柱穴であろうピット35から出土したN形式の土師器皿である。薄手感のある器壁や全形には、京都IV期の様相を残すが、口縁部上半が立ち上がり端部の外反度も弱く、京都V期古の様相を呈する。全体的な型式要素の特徴からは、京都IV期新からV期古の幅で見ることが出来るが、新しい要素を有することからV期古側に属すると判断しておく。

2～7は、遺構面1の基盤を成す整地土層とみている黄褐色泥砂層から出土している。2・3

は土師器皿A形式、4は土師器皿N形式の小、5は土師器皿N形式の大、6は東海地方産の山茶碗と呼称されている須恵器碗、7は中国からの輸入白磁の輪花皿である。土師器皿は、A形式では法量に、N形式では大の口縁端部の強い外反に古相を残すが、A形式では厚手化し特徴的な形態ラインがあいまいなものとなっており、N形式では大小ともに口縁部の上半が立ち上がる形態を呈しているなど、両形式の皿ともに京都V期古に属する型式の特徴を有するものと成っている。山茶碗は、京都IV期のものに通じる古相を残した断面三角形を呈する。古相を残しているが、京都V期古に共伴出土する資料とみてよいだろう。輸入白磁皿は、少し青味を帯びて透明感があり青白磁的である。器壁が非常に薄く仕上げられており、上質な印象を持つ。一個体では、年代幅を考慮しなければならないが、V期古で共伴出土していいだろう。

8の土師器皿は、遺構面1で成立していた溝1の最下層上面から出土している。形態的特徴からA形式に分類しているコースター形の皿である。底部外面周縁部の段状の屈曲が不明瞭になっており、口縁部は三角状に発達しており、IV期の形態はほぼ脱却しているが、底部外面周縁部にナデが及んでいるなどの点から、V期のもものでは古相を呈するとみることができるといえる、V期古に属するものといえる。

9~14は、遺構面1の上面に認められた凹み1から出土している。9~11は、土師器皿A形式、12・13は土師器皿N形式の大である。両者ともに基本的な型式の特徴は、黄褐色泥砂層から出土しているものにほぼ共通しているが、細部を比較すると若干ながら新相をやや多く示しているとみることが出来る。型式要素の判断からは、V期古からV期中の古相にかけての幅を持たせた見方も可能であろう。

瓦器碗(14)は、IV期中の登場期のものに比べると法量が少し縮小しており、高台がやや委縮化し、断面が三角形を呈しているが、体部内外面のヘラミガキや見込みの暗文などは、密で丁寧さを喪失していない。京城内での出土資料との比較からも、V期古(～中の古相)に共伴していい資料と判断される。生産地は、楠葉あるいは大和産と考えられるが決しがたい。

15~18は、遺構面1で成立していた土壇12から、19・20は同面の土壇17から出土している。15・19・20は土師器皿N形式、16は瓦器皿、17は瓦器碗、18は中国からの輸入白磁碗である。

土師器皿Nの15・19・20は、大小ともに口縁部外面にナデによる2段の凹みが廻るタイプであるが、口縁端部の形態はV期古の同形式のものに比べると、外反的様相が失なわれており、19などは外側に内傾する端面を持つものとなっている。法量を考慮し、技法痕跡・結果形状・全形などの型式要素の特徴から、V期新にかけての幅を見込んでおく必要はあるが、現段階ではV期中にはほぼ取まる12世紀前半代の資料とみておきたい。土壇12の瓦器碗は、V期古のものに比べると器壁に薄手感があり、高台を含めて全体に華奢な印象が出てきていて、体部外面のヘラミガキが粗くなっており、体部体面のヘラミガキも密さを残すが若干隙間が認められるようになっている。これらのことからV期中に共伴する瓦器碗のうちでは新相を持つ資料とみられる。瓦器皿は、瓦器碗よりは古相を持つが、同じ型式内で理解できるだろう。輸入白磁碗は、V期新~VI期古の12世紀後半代頃に主体を占めるようになる三角的な太玉縁のものほどに、口縁部の玉縁が発達して

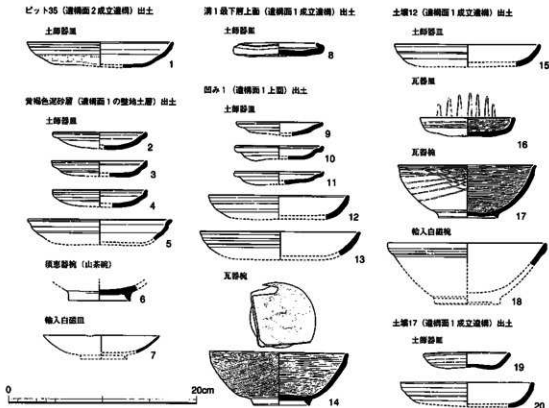


図6 出土土器・陶磁器実測図(1:4)

いない。V期古～中の幅で理解してよいものであり、V期中の共存資料で良いだろう。

上述した京都V期古に属する資料のうちでは、ビット35や黄褐色泥砂層から出土している土師器皿の様相は、鳥羽離宮跡第95次調査の際に、北殿の庭園地業内から、鎮壇具とされている一括出土した土師器皿類によく近似したものである。比較資料としてここで実測図を再度掲載(図7)して概説しておく。

1～6の土師器皿はA形式に、7～11はN形式に分類できる。胎土、製作技法、形態などの型式要素は、すべて京城内主流派に共通する。土師器皿A形式は、口径が10.0cm台～10.5cm台と法量に古相を残すが、全体に厚手感が増しており、細部の形態の特徴が丸味をもった曖昧なものになっている。口縁部の屈曲が明確なものもまだ多いが、それらでもまわしナデが抜ける部分では扁平化してしまっており、バランスが崩れた浅い全形を呈するものが主体となっている。

土師器皿N形式は、図示されているものはすべて大側であるが、大の内では口径15.0cm～16.0cm台の大1(7～10)と、17.0cm台の大2(11)に区別しなければならぬかもしれない。技法痕跡では、口縁部外面にナデによる2段の凹みの残るものがほとんどであるが、口縁部形態を見ると、8～10のように端部が外反的形態を呈するものと、7・10のように端部の外反が不明瞭になり、口縁部の上半が立ち上がり気味のものが見られる。前者は、IV期新の様相を持つものであり、後者はV期古の様相を持つものといえる。

この北殿の庭園地業内から出土している一群の土師器皿は、鳥羽離宮に直接関連するだろう既

出土土器資料のなかでは、一定量のまとまった資料としては、最も古相を呈するものである。京都Ⅳ期新の様相を多く持っているが、Ⅴ期古側に位置付けられる型式の特徴を持つ個体が幾つか含まれており、全体としては極めて中間の様相を持つ土器群ではある。鳥羽離宮跡関係の土器・陶磁器類は、型的に見れば、この北殿の土器群を頭にして急激に増加する。

ビット35や黄褐色泥砂層から出土している土器群が、北殿の土器とどの程度の時間距離があるのかを、差異の方が小さく重複する部分の方が大き

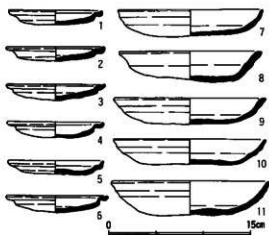


図7 北殿庭園地業内出土土器（1：4）（註3）

い型式要素だけでは決めたいが、個別土器群間に限定して、図示していない分を含めて見て、黄褐色泥砂層から出土している土器群の方が、Ⅴ期古的な型式要素が主体を成すようになっているとはいえる。鳥羽離宮関係への土器器血類の供給を、特定の生産者が継続的に担っていたことを前提として考えると、型式変化のスピードを比較的平均的に見るならば、この程度の型式差が生じ得る実時間は、10年前後以内と思われるが、今のところ考古資料で一般的認知が得られる実証的論拠を提示することは難しいので、あくまで推測の域を出るものではない。いずれにしろ、両土器群は大きな時間差を持つものではなく、比較的近い時間帯の内で若干の新旧関係を持つと見ることは大過ないだろう。

実際の時間差は置いておくが、両土器群との関係及び黄褐色泥砂層の出土土器群に対するこのような理解は、黄褐色泥砂層が東殿の殿舎の造営直前の整地土層であるという見方を支持するものとはなるだろう。

瓦 類

以下では、拓影を掲載している軒丸瓦（図8）の個別解説を、箇条書きにまとめて記し、主要遺物の項を終えておく。

1は、扁円形の軒丸瓦で、左に巻く三巴文である。瓦当外周はへら削り、表面には手掌痕が残る。山城栗栖野瓦窯の産。

2は、ゆがみは小さいが、扁円形の軒丸瓦で、右に巻く三巴文である。表層の残りが悪く、不明瞭であるが、瓦当外周はへら削りしたものであろう。表面には、手掌痕がわずかに残る。山城栗栖野瓦窯の産。

3は、擬正円形の軒丸瓦で、剣頭状の細い花卉を配した蓮華文である。外区に一条の圈線を施す。瓦当外周は、ナデ。山城産。

4は、擬正円形の軒丸瓦で、木瓜様の花卉を配する4弁の蓮華文である。弁間文に、細い凸線を置く。接合粘土・瓦当外周は縦方向の強い指ナデの後、外周に沿ってなでる。山城産。

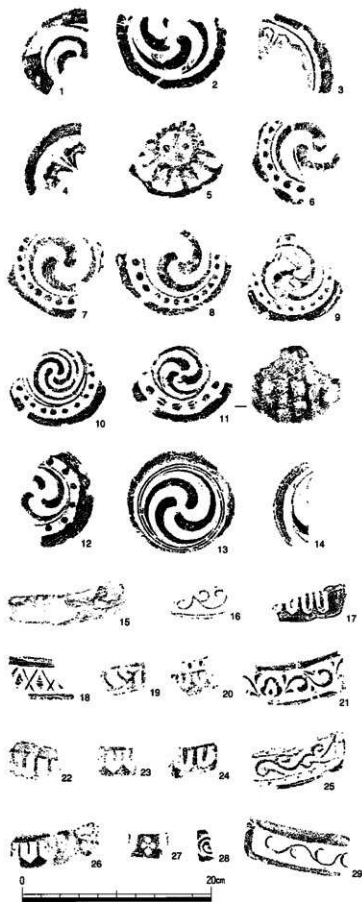


図8 出土瓦拓影(1:4)

5は、擬正円形の軒丸瓦で、中房に1+4の蓮子を配する。蓮華文は、中房圏線と周縁を凸線でむすんで8弁の車輪状の花弁をあらわす。瓦当外周・裏面は指オサエ、ナデで調整する。山城産。

6~8は、外区に珠文を配する。瓦当外周・裏面は指オサエ、ナデで調整する。

9は、周縁部には施文時の范型の痕跡が残り、瓦当右下には范型外の突起である外縁が明瞭に残る。頸部には、縄目叩きを施す。裏面は、指オサエ・ナデ調整。山城産。

10は、擬正円形の軒丸瓦で、左に巻く二巴文である。巴文の尾部は長く、後端が内側の文様尾部接続。外区には珠文を配する。瓦当外周・裏面は指オサエ・ナデ調整し、頸部に部分的な縄目叩きを施す。山城産。

11は、擬正円形の軒丸瓦で、左に巻く三巴文である。巴文の後端が内側の文様尾部に接続して圏線状を呈する。外区に大きめの珠文を配する。瓦当外周・裏面は指オサエ。表面には指の押圧痕が4本明瞭に残る。施文に際して瓦当用の粘土円盤を押圧した時の痕跡であろう。山城産。

12は、擬正円形の軒丸瓦で、左に巻く三巴文である。巴文の後端が内側の文様尾部に接続し

て圏線状を呈する。外区に大きめの珠文を配する。瓦当外周・裏面は指オサエ。

13は、擬正円形の軒丸瓦で、左に巻く三巴文である。巴文の後端が内側の文様尾部に接続して圏線状を呈する。外区に二重の圏線を施す。范型より小さい粘土円盤を用いており、下部の周縁は途切れる。瓦当外周上半は縦方向下半（顎部）は横方向にナデる。裏面は指オサエ・ナデ調整。山城産か。

14は、正円形の軒丸瓦で、右に巻く巴文である。巴文の後端が内側の文様尾部に接続する。周縁部には外縁が小さく突起する。灰白色から淡灰緑色の自然釉がかかる。瓦と外周・裏面はナデ調整。尾張産。

15は、唐草文を施すが、文様面の大半は剥落する。瓦当面は、ヘラ削り後に施文。瓦当上辺・顎部はヘラ削り、瓦当裏面から平瓦部凸面はナデ調整。山城栗栖野瓦窯の産であろう。

16は、半折曲げの軒平瓦で、右向きの唐草文と下辺の郭線が残る。瓦当面は、ヘラ削り後に施文。山城栗栖野瓦窯の産であろう。

17は、半折曲げの軒平瓦で、剣頭文を施す。瓦当面は、ヘラ削り後に施文。顎部はヘラ削り、瓦当裏面から平瓦部凸面はナデ調整。山城栗栖野瓦窯の産。

18は、格子の中に菱形を配する幾何学文を施す。平瓦部凹面の布目が、瓦当上辺の一部に続く。顎部下端はヘラ削り、瓦当裏面から平瓦部凸面はナデ調整。山城栗栖野瓦窯の産であろう。

19は、折曲げの軒平瓦で、左向き唐草文が残る。平瓦部凹面の前端・顎部下端はヘラ削り瓦当裏面から平瓦部凸面は叩きの条痕が残る。

20は、折曲げの軒平瓦で、剣頭文を施し、上辺に珠文を配する。平瓦部凹面の前端・顎部下端はヘラ削り、瓦当裏面からオサエ。平瓦部凸面の瓦当折曲り部に強い指先の押圧痕が残る。

21～24は、折曲げの軒平瓦で、剣頭文を施す。平瓦部凹面の前端・顎部下端はヘラ削り、瓦当裏面からオサエ。21は、平瓦部凸面の瓦当折曲り部に布目痕が残る。

25は、折曲げの軒平瓦で、4弁の花文を配し、左右に剣頭文を施す。平瓦部凹面の前端・顎部下端はヘラ削り、瓦当裏面からオサエ。

26は、折曲げの軒平瓦で、左巻きの巴文を施す。顎部下端はヘラ削り、瓦当裏面からオサエ。

27は、貼付けの軒平瓦で、均整唐草文で花卉状の中心文を施す。周縁上端・顎部下端・側縁はヘラ削り、瓦当裏面は板ナデ。平瓦部凸面は縄目叩きを施す。河内向山瓦窯産。

28は、供土の軒平瓦で、前端に厚みを持たした粘土板から成形したもの。内区に均整唐草文を施し、細い郭線で区画した外区には珠文を配する。范型の入り込みは浅く、周縁の上辺は不明瞭。顎部下端はヘラ削り、平瓦部凸面は丁寧なヘラナデ。讃岐産。

29は、貼付けの軒平瓦で、偏向唐草文を施す。周縁上辺はヘラ削り。顎部下端・瓦当裏面から平瓦部凸面は丁寧なナデ。平瓦部凹面は、布目痕が認められない。灰白色から淡灰緑色の自然釉がかかる。尾張産。

4 ま と め

今回実施した発掘調査によって現表土下-1.0~1.3m程で、整地土層（第9層）を検出することが出来た。整地土層は、上面がほぼ平坦に形成されており、調査区の外へ広がっている。出土遺物や上面に成立している遺構の年代観などから、平安時代後期の11世紀末から12世紀初頭頃の間に形成されたと推測される。その上面では、柱穴と見られるピットや土壇及びL字状に設置された溝状遺構など、建物及び建物に関連するであろう各種の遺構を検出している。これらの遺構群は、検出状況などから建物が存在したであろう敷地の南西角付近に位置しており、建物あるいは建物群の中心は北から北東方向と推定される。これらの遺構は最も古く位置付けられるものでは、11世紀末から12世紀初頭頃まで遡る。12世紀代に入って形成されるものも多いが、大半の遺構は平安時代末期から鎌倉時代初頭頃の12世紀代後半頃には埋没し、その姿が消えている。これらの遺構埋土からは、土師器や瓦器碗と伴に平安時代後期瓦が数多く出土している。

整地土層とその上面に展開している遺構は、その年代観や周辺既調査成果からの位置関係を考えるならば、東殿の造営に伴う地業とその上に形成された殿舎の一部あるいは関連施設と見ることが出来るだろう。調査区が狭小なうえに重要部分を攪乱壊で整地土層まで削除されているので、建物などの全形を推測するに足る資料は得られなかったが、東殿の殿舎敷地の一端の可能性が高い場所を調査出来た事は大きな成果である。

平安時代後期の整地土層直下でもう一層、整地土層と見ている土層（第10層・第11層）を検出している。この土層は出土遺物から見れば、上の整地土層と時期的な隔たりはあまりなく、同じ平安時代後期の11世紀末頃の地業である。東殿が築造された頃のものと考えなのか、東殿に関連した地業が短期のうちに二度行なわれたと見るのかは現状では決し難い。ただ、この整地土層上面で検出したピットからの出土遺物は、上の整地層などから出土しているものと同型式に属するものではあるが、古相を帯びたものが主であり、上下土層の間には短期間とはいえ、確実な時間差があるとも考えられる。隣接地での調査の進展を待って明確な結論を出すべきだろう。

平安時代後期の東殿築造に伴うと見ている整地土層は、自然地形としてあった湿地内堆積粘土層上部を利用した水田址の上層に積み上げられていた。この自然地形の湿地に対応する微高地は、調査地よりも北部にあったものと推測される。既調査の成果から、雑舎が建ち並んでいた地域と目される。整地土層として用いられた土は、それら微高地を形成していた地山土であろう。北向不動院の東側から南側にかけて既調査によって検出されている苑地は、当調査地を含んで存在していた自然の大きな湿地の残存部を利用して築造されたものと考えられる。鳥羽天皇陵や近衛天皇陵は、本来湿地の東側に形成されていた自然地形の微高地に占地されているものと推測される。

東殿北部の雑舎群が存在していたとされる地域は、中世鳥羽の集落へ継続し発展していくものと考えられているが、元来の微高地の上に形成されていると見られるので、平安時代後期以前の村落もそこに存在していた可能性は高い。当調査地で、平安時代後期整地層下で検出している、

平安時代中期頃までの湿地を利用した耕作地は、北部に想定し得る集落の住民が耕作していた可能性は十分あるだろう。また、このような自然地形の理解をもとに考えると、東殿も他の宮殿と同様に低湿地側にあえて迫り出して築造されていたことが理解出来る。一般的な宅地の占地とは相反するかなり強引な占地と築造が行なわれていたようだ。

平安時代後期の整地土層上面に展開する東殿に関連すると見ている遺構群は、形成期から100年とたない平安時代末期から鎌倉時代初頭頃には衰退し、鎌倉時代には遺構遺物ともに激減するのだが、遺構面は室町時代前半期頃までは明確な転用痕跡を示さないままに遺存していたものと見られる。東殿が存在していた敷地は、主要殿舎が衰退して以降も永く中世まで比較的管理状態が良好であったものと思われる。同じ敷地内に遺存していて現在にまで残る鳥羽天皇陵、安楽寿院、北向不動院などが存在していたことが影響している可能性が高い。このように、東殿が推定される敷地も室町時代後半期には様相がまた大きく変化するようであり、江戸時代前期には再び大きく変化し、比較的小さい単位の宅地となっていくようである。室町時代後半代における変化は、当敷地の管理状態が大きく変わった結果もたらされたものであると推測され、宮殿敷地内の耕作地化が顕著になって行ったものと考えられる。江戸時代以降は、現代まで宅地としての利用が続いているものと理解される。

小規模な調査であったが、鳥羽離宮が形成された平安時代後期を中心にして平安時代以前から現代に至る当地の歴史の大筋を考古資料によって知り得たことは、今回実施した発掘調査の大きな成果である。

註1 長宗策一・鈴木久男「第三部 平安京の近郊 第五章 離宮別業 3 鳥羽殿」『平安京提要』角川書店 平成6年6月15日。

註2 小森俊寛・上村憲章・平尾政幸「第四部 平安京の遺物 第二章 土器陶磁器」『平安京提要』角川書店 平成6年6月15日。

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市文化財研究所 1996年。

註3 「京都市埋蔵文化財概要 昭和58年度」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年。

II 中久世遺跡

1 調査経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査は、集合共同住宅建設工事に伴うものである。当調査地は、縄文時代から室町時代に至る、複合遺跡である中久世遺跡の西部に位置する。平安時代から中世にかけては、東寺領である下久世荘が営まれていた地域でもあり、既調査によって弥生時代（竪穴住居・方形周溝墓・河川）、古墳時代（竪穴住居・溝）、奈良時代から室町時代（建物・井戸・溝）など多くの遺構を検出している。また、土器・石器・木器などの豊富な遺物が出土しており、京都市域でも重要な遺跡のひとつである。当調査地は最近まで耕作地として利用されていたが、今回新たに共同住宅が建設されることとなった。このため平成11年5月12日に京都市埋蔵文化財調査センターによる試掘調査が実施され、竪穴住居・柱穴・土壇・溝などの遺構が比較的浅い所で確認された。その結果、建設工事に先立ち当(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することとなった。

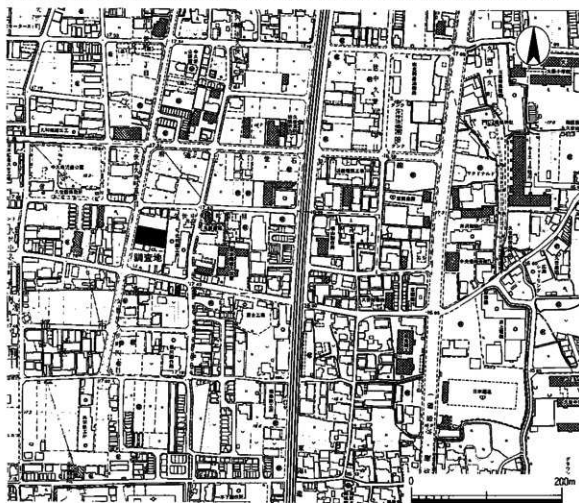


図9 調査位置図 (1:5,000)

(2) 調査の経過

調査は、新築される建物の基礎が位置する部分を中心に東西23m・南北14mの長方形の調査区を設定し、まず、耕土を重機を用いて掘削、排除した。そして、遺構面の検出を行った結果、同一面で各時期の遺構を重複した状態で確認した。このため、調査は大きく

新古の2時期に分けて実施することとし、新しいものから順次調査を実施した。調査の最終段階において、調査区外に延びる可能性のある遺構を追求するために、北側の一部を拡張し、その状況を確認して調査を終了した。

2 遺 構

(1) 層 序

当地は、調査前は水田であった。基本層序は上層に耕土が約25cmあり、その直下は黄褐色砂泥層(2.5Y5/4)の地山となる。今回、遺構はすべてこの地山である黄褐色砂泥層の上面で検出した。遺構面の地形は平坦で、標高16.5m前後である。全体にかなり削平をうけていると考えられ、遺構の遺存状況は良好とは言い難い。



図10 調査区配置図 (1:500)

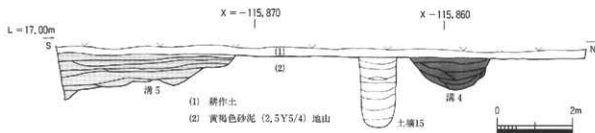


図11 西壁断面図 (1:100)

(2) 遺構

検出した遺構には方形周溝墓、竪穴住居、掘立柱建物、櫓、井戸、土壇、溝のほか、多数の柱穴があり、時期的には弥生時代から平安時代までに及ぶ。前述のごとく、これらはすべて同一面で確認したため、直接の重複関係や出土遺物などの手がかりが得られないものに関しては、時期を明確に把握できなかった。以下、時期ごとにその概要を述べる。

弥生時代の遺構 (図12 図版4-1)

方形周溝墓、土壇などを少数確認しており、中期から後期のものと考えられる。いずれも、後世にかなり削平をうけており、残存状況は良好ではない。

方形周溝墓1 調査区の西部で検出した。北側を後述する古墳時代の溝4に壊されているものはほぼ全容を明らかにできた。規模は一辺が約11mで、周溝の幅は0.5~1.8m、深さは検出面より0.9mを測る。方位は北が西へわずかに振れている(N-8°-W)。埋葬主体部は検出していない。周溝内からは、供献されたと考えられる中期の壺形土器が破片となって出土した。(図13 図版4-2)

土壇2 調査区の東部で検出した。東西1.8m、南北1.2mの方形で、深さは検出面より0.4mを測る。埋土からは、土器が少量出土した。(図13)

土壇3 調査区東部で検出した。南側を後の遺構に壊されており、北半部幅1.8mの楕円形で、深さは、検出面より0.5mを測る。ここからも、中期の土器が少量出土した。

古墳時代の遺構 (図12 図版4-1)

調査区の全域にわたって前期の溝、中期から後期の溝、竪穴住居、土壇を検出した。このほか、土壇や削平をうけた竪穴住居の残欠と考えられる柱穴がある。

溝4 調査区の北部で検出した東西方向の溝であるが、北側へ延びる南北溝と合流し、T字形を呈する。幅約2m、深さは検出面より0.85mを測る。埋土から庄内式土器並行期の土器が出土した。

溝5 調査区の南西部で検出した南北方向の流路で、東肩部を確認したに留まる。深さは検出面より1.3mで、東肩部を約9m確認した。埋土から布留式土器並行期の土器が出土した。

溝6 調査区の西部で検出した。北側から南流する2条の溝が調査区北部で合流して1条となり、やや蛇行しながら調査区外に延びる。幅0.5~0.8mで、深さは検出面より0.3mを測る。延長約16mを確認した。この溝はその位置から、後述する竪穴住居7と関連する溝であると考えられる。

竪穴住居7 調査区の東部で検出した。隅丸方形と推定できる住居址である。全体にかなり削平を受けており、床面は残っておらず、周囲の壁溝が部分的に残存しているに過ぎない。規模は一辺約8.5m、方位は北が西へ振れている(N-18°-W)。主柱穴は3基を確認したが、本来は4基であったと考えられる。柱穴の堀形はいずれも円形で、径0.35m、深さ0.4mである。各柱

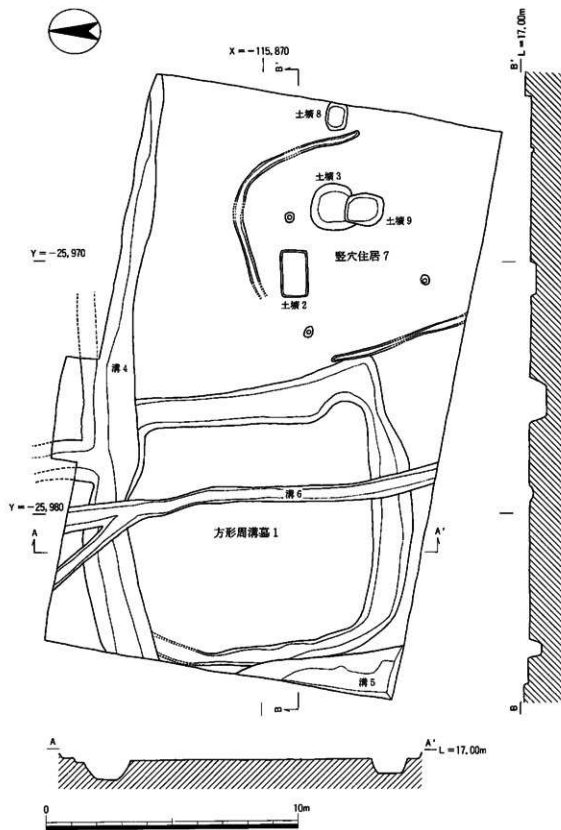


图12 平面图 (弥生-古墳時代 1 : 150)

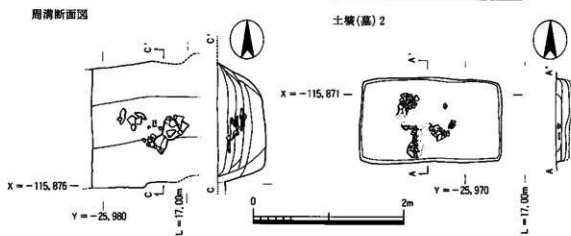
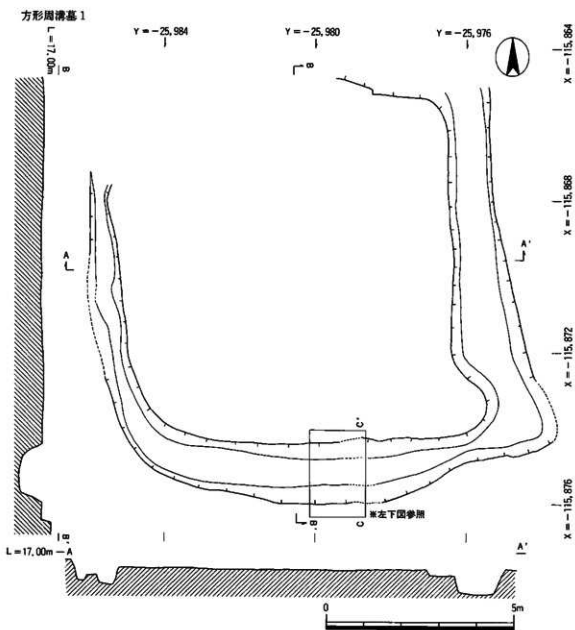


图13 方形周溝墓1・土壇2 遺構実測図

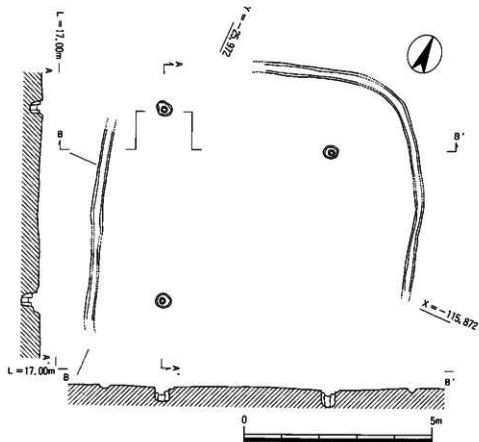


図14 竪穴住居7遺構実測図(1:100)

間は約5mを測る。壁溝は幅0.3m、深さは検出面より0.15mを測る。遺物は後期の土器片が壁溝から出土しているが、いずれも小片で保存状況も良くない。(図12 図版4-1)

土壌8 調査区の東端で検出した。円形で直径1.0m、深さは検出面より0.3mを測る。埋土から、土器片が少量出土した。

土壌9 調査区の東部で検出した。方形で、東西1.2m、南北1.5m、深さは検出面より0.4mを測る。埋土からは、土器片が少量出土した。

飛鳥時代から奈良時代の遺構(図15 図版5)

掘立柱建物3棟、櫓2列、土壌のほか多数の柱穴を検出した。この時期の遺構は調査区の西側にかたよって分布している。土地利用に計画性があったとも考えられる。建物群は重複関係と方位の違いによって三時期に分けることができる。まず、建物10と建物11とは重複関係によって、建物10が先行することが明らかである。建物12は両者と方位が異なるため、時期が異なると考えられるが、重複しておらず前後関係は不明である。また、櫓13・14は、建物12と同方位で設置されているが、他の2棟との掘れ差も大きいものではなく、これらの建物群に伴うものと理解しておきたい。柱穴からの出土遺物も少なく、時期は明らかにできなかった。

建物10 調査区の北西部で検出した、東西棟である。東西7.2m(3間8尺平均)、南北4.8m(2間8尺平均)を測る。柱掘形は一边0.6~1.0mの方形で、深さは0.2~0.4mを測り、方位は

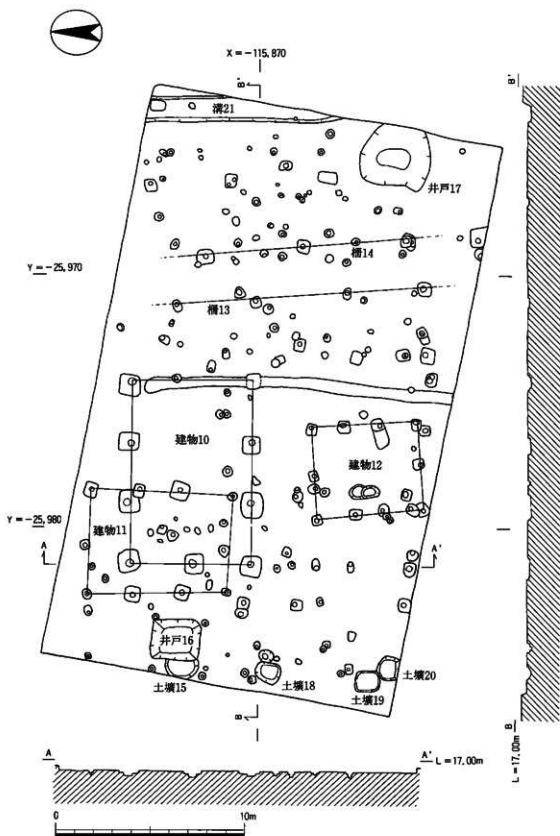
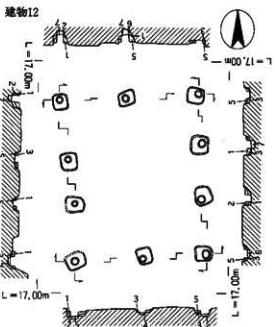
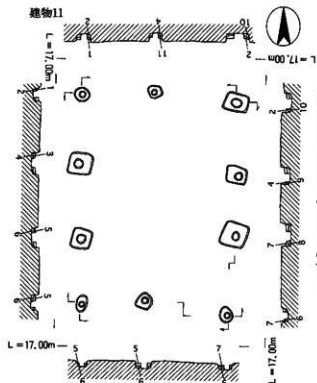
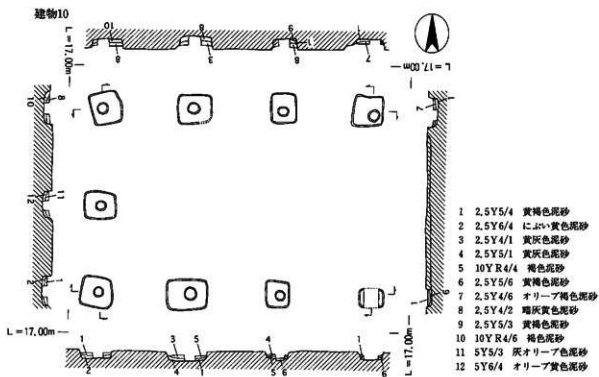


図15 平面図 (飛鳥・奈良・平安時代 1 : 150)



- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 2.5Y5/1 黄灰色泥砂 | 7 2.5Y4/6 オリーブ褐色泥砂 |
| 2 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 | 8 10Y R4/3 におい黄褐色泥砂 |
| 3 10Y R4/6 褐色泥砂 | 9 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂 |
| 4 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂 | 10 2.5Y4/1 黄灰色泥砂 |
| 5 2.5Y5/6 黄褐色泥砂 | 11 2.5Y5/3 黄褐色泥砂 |
| 6 2.5Y5/4 黄褐色泥砂 | |

- | |
|--------------------|
| 1 2.5Y4/1 黄灰色泥砂 |
| 2 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 |
| 3 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂 |
| 4 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 |
| 5 2.5Y5/1 黄灰色泥砂 |
| 6 2.5Y5/4 黄褐色砂泥 |
| 7 2.5Y4/6 オリーブ褐色泥砂 |
| 8 2.5Y5/3 黄褐色泥砂 |



図16 建物10・11・12遺構実測図 (1:100)

正方位である。(図16 図版6-2)

建物11 調査区の北西部で検出した、南北棟である。規模は東西4.2m(2間6尺~7尺)、南北5.4m(3間6尺~7尺)を測る。柱堀形は方形と円形のものがあり、方形は一辺0.4~0.6mで、円形は直径が0.3~0.4mである。深さは0.15~0.35mを測り、方位は正方位である。(図16 図版5)

建物12 調査区の南西部で検出した、南北棟である。規模は東西3.6m(2間6尺平均)、南北4.2m(3間4尺~5尺)を測る。柱堀形は一辺0.4~0.5mの方形で、深さは0.1~0.25mを測り、方位は北が若干西に振れる(N-2°-W)。(図16 図版6-2)

構13 建物群の東側で検出した南北方向の櫓列である。柱穴を4基(3間分10m)を検出したが、南北両方へ延びているとみられる。柱堀形は一辺0.3~0.5mの方形を呈し、深さは0.1~0.15mである。方位は、建物12と同じく北がやや西へ振れている。(図15 図版5)

構14 建物群と構13の東側で検出した南北方向の櫓列である。柱穴を3基(2間分8m)を検出したが、この櫓も南北両方へ延びているとみられる。柱堀形は一辺0.4~0.6mの方形を呈し、深さは0.2~0.25mである。方位は、建物12・構13と同じで、北でやや西へ振れている。(図15 図版5)

土壕15 調査区の西端で検出した。本来は円形を呈していたと考えられるが、東側を後の遺構に壊されている。残存する西半部の幅1.3m、深さは検出面より1.8mである。埋土から土師器、須恵器片が出土している。

平安時代の遺構(図15 図版5)

井戸2基、土壕、溝などを検出した。このほかに柱穴が少数存在するが、建物としてはまとめることができなかつた。いずれも後期のものと考えられる

井戸16 調査区の西端で検出した。方形で、東西1.5m、南北2.0m、深さは検出面より1.5mを測る。井戸側の痕跡は認められず、素掘りの井戸と思われる。埋土は大きく4層に分かれ、上層の暗灰黄色泥砂層からは土師器、須恵器、瓦器などの小片が少量出土した。また、井戸の周辺に柱穴を検出しており、上屋をもつ井戸であると考えられる。柱堀形は、直径0.3mの円形で、深さは0.2mを測る。

井戸17 調査区の東端で検出した。不整な円形で、東西2.2m以上、南北2.8m、深さは検出面より1.2mを測る。井戸側の痕跡は認められず、素掘りの井戸と思われる。埋土は、大きく4層に分かれ、上層の黄褐色泥砂層からは土師器、須恵器、瓦器などの小片が少量出土した。

土壕18 調査区の西端で検出した。楕円形で東西0.8m、南北1.0m、深さは検出面より0.4mを測る。埋土からは土師器、須恵器、瓦器などの小片が少量出土した。

土壕19 調査区の南西隅で検出した。方形で東西0.8m、南北1.0m、深さは検出面より0.4mを測る。埋土からは土師器、須恵器、瓦器などの小片が少量出土した。

土壕20 調査区の南西隅で検出した。形状は楕円形と考えられ、東西0.9m、南北0.7m以上、

深さは検出面より0.4mを測る。埋土からは土師器、須恵器、瓦器などの小片が少量出土した。

溝21 調査区の北東部で検出した。幅1.0m、深さは検出面より0.1mを測る。約7mを確認した。埋土からは土師器、瓦器などの小片が少量出土した。

3 遺物

今回の調査では遺物が整理箱に11箱出土したが、その大半は土器類である。ほかに石器が少量ある。

(1) 土器 (図21 図版7)

土器は、弥生時代から平安時代（後期）までのものが出土しており、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器などがある。弥生時代（中期）と古墳時代（前期）の遺物が多く、飛鳥から奈良時代、平安時代（後期）のものが少量ある。以下、主なものを時期ごとに概説する。

弥生時代の土器

弥生土器 壺（1・2）は中期「皿様式」に属する。1は、大型で球形の体部を持つ。頸部は外上方に立ち上がり、口縁は大きく外反する。端部は下方に拡張して外側に面を持つ、端部下方に斜めの刻み目を施す。口縁部から頸部内外面にヨコハケを施す。底部は欠損して不明であるが、平底であると考えられる。方形周溝墓1から出土した。2はやや大きな平底に縦長の体部をもつ。頸部は外上方に立ち上がり、下部に凹線文を施す。口縁部は大きく外反し、端部は下方に若干張り出して外側に面を持つ。口縁部内側に櫛状の工具で列点文が施されている。土壇3から出土している。

古墳時代の土器

主に前期の土器類が溝、流路などから出土しており、器形には壺・甕・高杯などがある。後期の須恵器の杯身などが認められるが、いずれも小片で量も少ない。この中で溝4からは前期（庄内併行期）の土器が少量出土している。

古式土師器 甕（3・4・5）は、いずれも口縁部が外上方に「ハの字」に開くものである。3は、口縁端部を上方につまみ上げている。体部外面は細いタタキ、内部はヘラケズリを施す。胎土に雲母と角閃石を多く含む。4は、口縁端部を角張って取めており、体部外面はハケ調整、内面はナデである。5は、体部外面ハケ調整、内面は口縁部までハケ調整である。いずれも溝4から出土している。壺（6）は、底部は丸底で球形の体部をもつ。口縁は「く」の字に外上方へ開く。端部は外反気味で、先端を丸くおさめている。体部上半に円形の小孔を1個穿っている。体部はナデ、口縁部はヨコナデを施す。溝5から出土している。

須恵器 杯身（7）は、小ぶりて底部は丸味を持ち、体部は直線的に外上方へ開く。受部内側の立ち上がりは小さめで、端部は直立し、尖り気味に取められている。底部外面はヘラオコシの

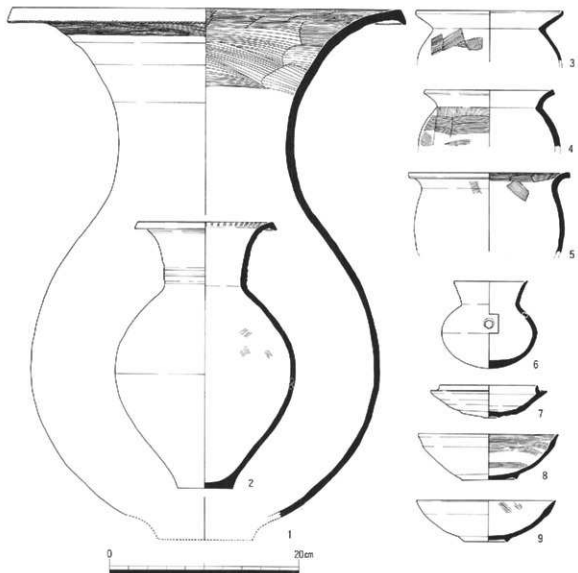


図17 土器実測図（1：4）

後ナデ調整を加えており、他の内外面は回転を利用したナデである。底部内面の中央部に不定方向のナデが認められる。和泉陶邑窯の既編年ではTK209に比定できる。建物11の柱穴から出土している。

飛鳥時代の土器

飛鳥時代の土器は、須恵器をわずかに確認しているに過ぎず、器形も杯蓋のみで見られるのみである。

奈良時代の土器

奈良時代の土器は、土師器と須恵器が建物柱穴・土壇などから出土している。いずれも小片で遺存状態はよくない。

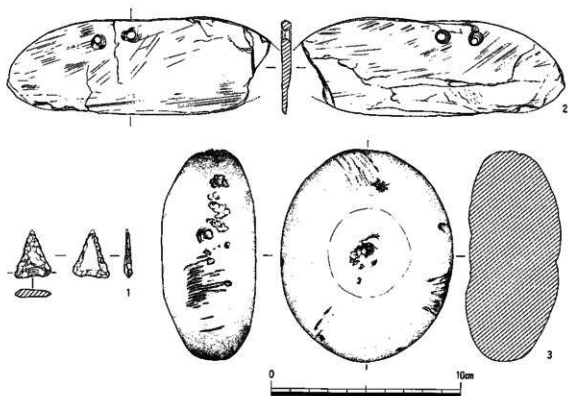


図18 石器実測図 (1:2)

平安時代の土器

後期の土師器・須恵器・瓦器が井戸・土壌などから、わずかに出土している。

瓦器 椀 (8・9) 内湾しながら立ち上がる口縁部が残存しており、端部は丸く取め、内側に一条の沈線が巡る。8は、内面に密に横方向のヘラミガキを施し、外面はオサエ痕を残す。土壌20から出土している。9は内面外面共に磨滅している。井戸16から出土している。

(2) 石器 (図18)

石器には、石鏃・石包丁・凹み石があり、ほかにサヌカイトの剥片が数点ある。今回出土した石器は破損しているものが多く、数も少ない。出土状況からみても本来の遺構に伴っているものは少ないと考えられる。いずれも弥生時代中期以降のものであると考えられるが時期は明確にできなかった。

石鏃 打製 (1) が出土している。凹基無茎式石鏃で調整は粗く両面に剝離面を残している。石材はサヌカイトである。土壌3から出土している。

石包丁 磨製 (2) のものが出土している。若干破損しているが、残存状況は良好である。身部分の幅は広く、半月状を呈する。身の背に近い部分には二つの縦孔が両面から穿たれており、ほぼ中央で結合する。刃は両刃でわずかに内湾しているが、ほぼ直線である。石材は粘板岩である。溝4から出土している。

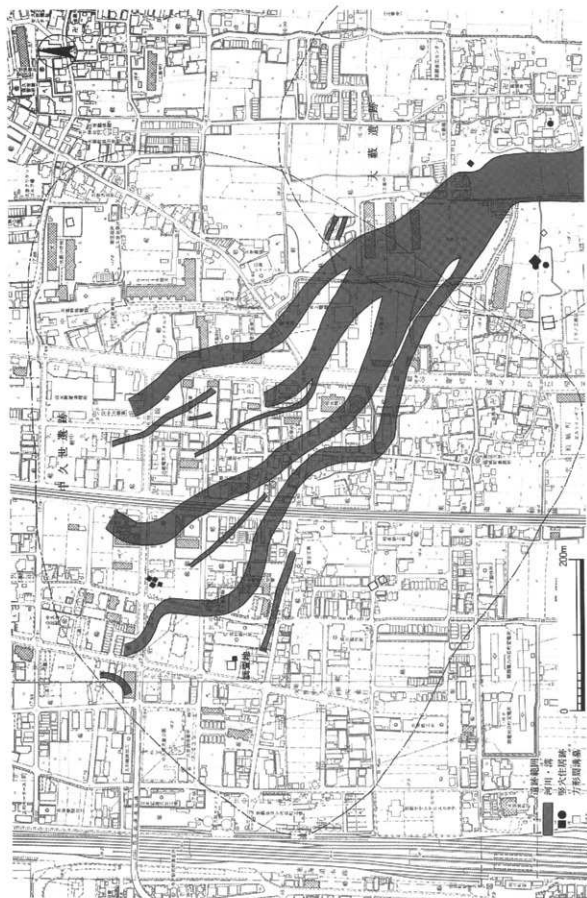


图19 张生—古墳時代遺構復元図 (1 : 5,000)

凹み石 3の形状は扁平な円形を呈する。全体に表面が平滑であり、表裏ともに中央に浅い窪みが穿たれる。周囲には使用の結果と考えられる敲打痕が認められる。物を割り砕いたり、搥りつぶしたりするために用いられた石であると考えられる。

4 まとめ

今回の調査では、弥生時代、古墳時代、飛鳥から奈良時代、平安後期の各遺構を検出したことにより、中久世遺跡の様子を知るうえで重要な資料を得ることができた。ここでは、その主な成果についてまとめる。

弥生時代の遺構としては、方形周溝墓や土墳（墓）などを検出しており、弥生時代中期には、当地は墓域の一部であった事が判明した。集落の実体は明らかとなっていないがこれまでの調査でも遺跡の南部で方形周溝墓数基が確認されており、付近に集落が展開していた可能性が強まったといえよう。

古墳時代の遺構としては、中期に推定できる竪穴住居および住居を区画する溝などを検出した。こうした状況から、古墳時代中頃には集落が形成されていたと考えられる。そこで中久世遺跡におけるこれまでの調査成果と合わせて検討すると、まず、今回の調査地は遺跡の西部に当たる。ここは北西から南東方向に流れる、数条の大規模な流路の西側の微高地にあたる（図19）。既調査では、これらの流路間の微高地の北部で、古墳時代前期の竪穴住居群を検出している。未だその全容をつかむには難しい状況ではあるが、今回の調査で流路の自然堤防上に展開していた集落の一端が明らかになったと言えよう。

飛鳥から奈良時代の建物群を検出できたことも成果である。中久世遺跡では、これまでも遺跡北西部や南部で建物や井戸を確認しており、古墳時代に続いて大規模な集落が展開していたと考えられる。

このように中久世遺跡とその南東に隣接する大藪遺跡周辺では、弥生時代から奈良時代にかけて連綿と集落が営まれていた状況が次第に明らかになりつつある。調査の現状はその初歩的段階と言わざるを得ず、今後とも綿密な調査を継続する必要があるだろう。

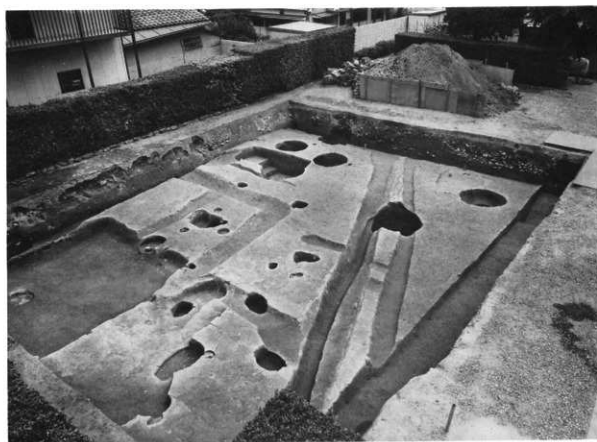
報告書抄録

よ り が な	きょうとしなにいせきはっくつちようきがいほう							
書 名	京都市内遺跡発掘調査概報 平成11年度							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編 著 者 名	小森俊寛・出口 兼・原山克志							
編 纂 機 関	財団法人京都市歴史文化研究所							
所 在 地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1 TEL075-415-0521							
発 行 機 関	京都市文化市民局							
所 在 地	〒604-0925 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488 TEL075-222-3108							
発 行 年 月 日	西暦2000年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コ ー ド		北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
鳥羽離宮跡 第141次	京都府京都市伏見区 竹田浄菩提院町76	26100		34度 56分 56秒	135度 45分 19秒	1999/5/20～ 7/14	181㎡	事務所兼 倉庫建設
中久世遺跡	京都府京都市南区久 世中久世町4丁目37	26100		34度 57分 18秒	135度 42分 56秒	1999/7/21～ 10/1	320㎡	共同集合 住宅建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳥羽離宮跡 第141次	宮殿跡	平安時代後期	礎物跡 整地土層	土師器・瓦器・瓦類				
中久世遺跡	高城跡 果落跡	弥生時代 古墳時代 飛鳥-奈良時代	方形周溝墓 竪穴住居址 掘立柱建物	弥生土師・石器 土師器・須恵器				

圖 版



1 調査前全景（南西から）



2 調査区全景 遺構面1（北西から）



1 土壇17 (北から)



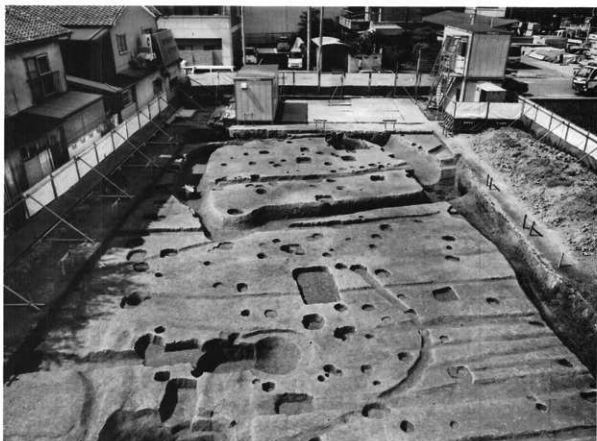
2 調査区全景 遺構面2 (南から)



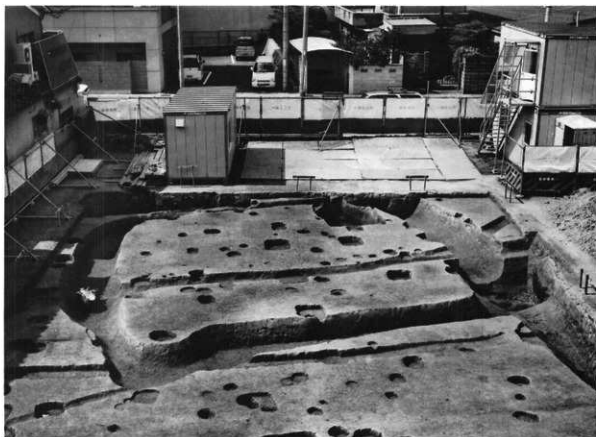
1 断割り北・東トレンチ 灰褐色粘質土排土後（南西から）



2 北壁層位別遺物採取区・人や偶蹄目の足跡（南から）



1 調査区全景 弥生～古墳時代(東から)



2 方形周溝墓1 (東から)



1 調査区全景 飛鳥・奈良・平安時代(東から)



1 建物10 (西から)



2 建物12 (北西から)



京都市内遺跡発掘調査概報

平成11年度

発行日 2000年3月31日
発行 京都市文化市民局
住所 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
編集 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
TEL (075) 415-0521
印刷 真 陽 社